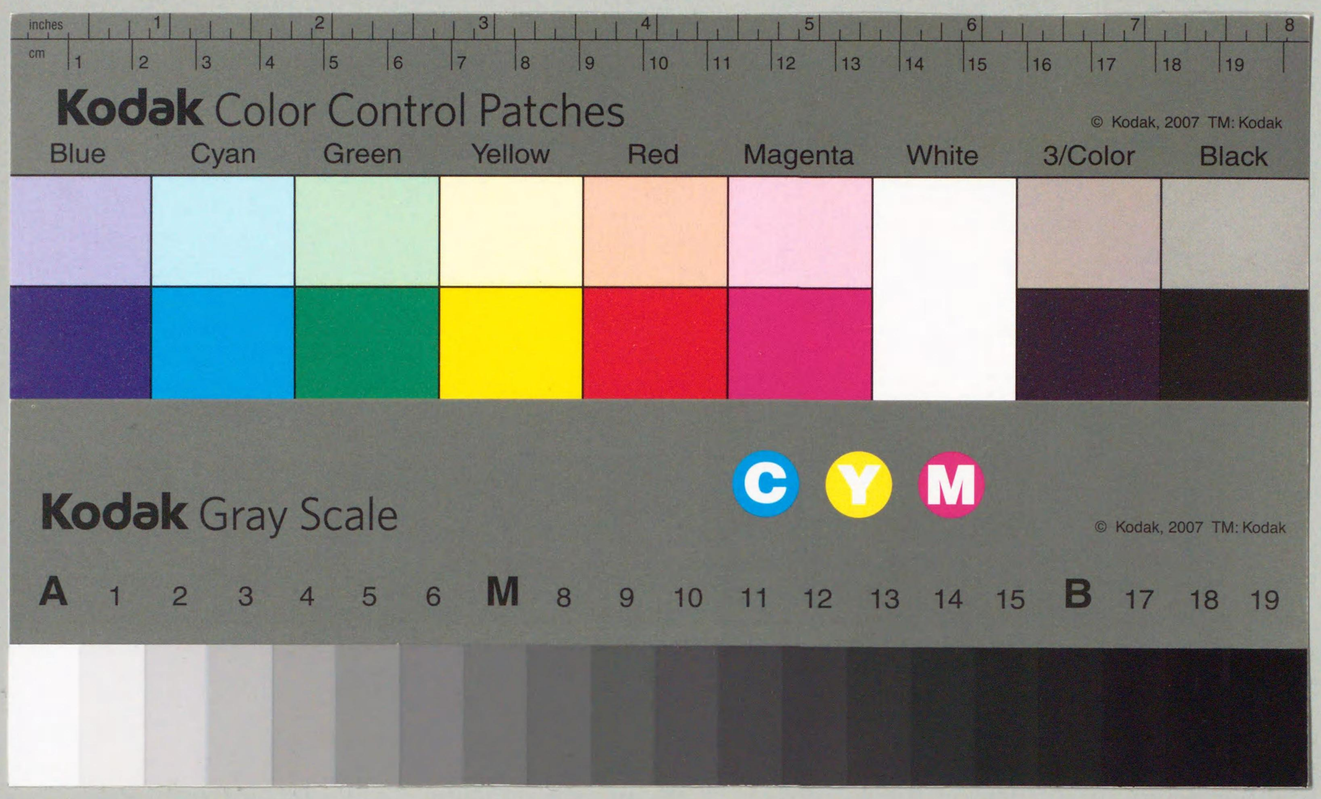


K231
35
81W57825

金井紫雲編

藝術資料

柳躑躅

第一期
第四冊

合名會社芸艸堂刊行

56.7.14
図書館

一立齋廣重筆　木曾街道洗馬圖

藝術資料

第一植物篇

第四册『柳、躑躅』

要目

口繪

一立齋廣重筆　木曾街道洗馬圖（原色版）
狩野信政筆　柳襖繪（知恩院藏）（玻璃版）
宇治橋屏風（市田家藏）
山樂筆　雪中柳鷺襖繪（天球院藏）
山樂筆　柳圖襖繪（醍醐三寶院藏）
傳永德筆　柳山水襖繪（聚光院藏）
傳永德筆　雪柳圖襖繪（西本願寺藏）
馬麟筆　柳堤牧童圖
周文筆　柳山水圖
雪山筆　春柳雨鴉秋柳風鷺雙幅
狩野元信筆　柳燕圖
菘翁筆　柳蔭書屋圖
與謝蕪村筆　柳蔭騎路圖
松村景文筆　柳鷺旭影圖
光琳筆　躑躅圖（團男爵家藏）
光琳筆　四季草花六曲屏風の一部
光琳筆　檜に躑躅圖（杉浦家舊藏）
應擧筆　熊に躑躅圖（尾州家傳來）
乾山筆　躑躅小屏風
柳（岡本東洋氏撮影）
躑躅柳圖方鏡（屏繪）（岡本東洋氏撮影）

本文

柳の概說……一
楊柳十題……三
楊柳觀音　五柳先生　定家卿と柳
隨堤の柳　柳の御所　柳の船
柳の井　六角堂　柳の絮
柳の名畫……八
柳の畫題……一一
謠曲『遊行柳』……一三
倭漢朗詠集の柳　詩經の柳……一四
柳の漢詩……一五
萬葉集の柳……一六
柳の名木……一七
柳の名歌……一八
芝居の柳……二〇
俗曲の柳……二二
柳の名句……二三
躑躅の概說……二四
躑躅の形態　躑躅の種類
晉山世稿の記事　日本に於ける流行
躑躅の名所　躑躅の名木
躑躅の品種……二六
躑躅の畫……二八
躑躅の詩……二九
躑躅の歌……三〇
躑躅の名句……三一

藝術資料

第一植物篇

第四册『柳、躑躅』

要目

口繪

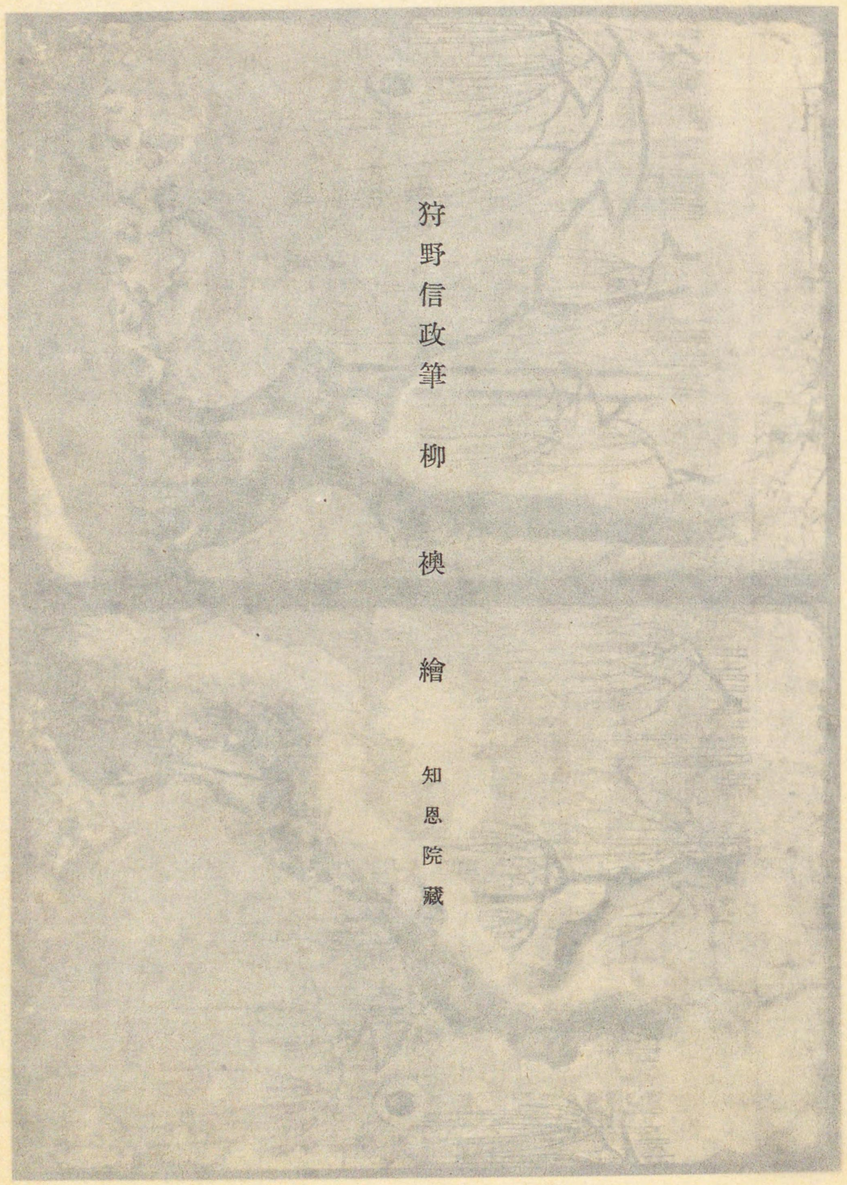
一立齋廣重筆　木曾街道洗馬圖（原色版）
狩野信政筆　柳襖繪（知恩院藏）（玻璃版）
宇治橋屏風（市田家藏）
山樂筆　雪中柳鷺襖繪（天球院藏）
山樂筆　柳圖襖繪（醍醐三寶院藏）
傳永德筆　柳山水襖繪（聚光院藏）
傳永德筆　雪柳圖襖繪（西本願寺藏）
馬麟筆　柳堤牧童圖
周文筆　柳山水圖
雪山筆　春柳雨鴉秋柳風鷲雙幅
狩野元信筆　柳燕圖
菘翁筆　柳蔭書屋圖
與謝蕪村筆　柳蔭騎路圖
松村景文筆　柳鶯旭影圖
光琳筆　躑躅圖（關男爵家藏）
光琳筆　四季草花六曲屏風の一部
光琳筆　檜に躑躅圖（杉浦家舊藏）
應擧筆　熊に躑躅圖（尾州家傳來）
乾山筆　躑躅小屏風
柳（岡本東洋氏撮影）
躑躅（岡本東洋氏撮影）
柳圖方鏡（原繪）

本文

柳の概說……一
楊柳十題……三
楊柳觀音　五柳先生　定家卿と柳
隨堤の柳　柳の御所　柳の船
柳の井　六角堂　柳の架
柳の名畫……八
柳の畫題……一二
謠曲『遊行柳』……一三
倭漢朗詠集の柳……一四
詩經の柳
柳の漢詩……一五
萬葉集の柳……一六
柳の名木……一六
柳の名歌……一七
芝居の柳……一八
俗曲の柳……二〇
柳の名句……二三
柳の概說……二三
躑躅の形態　躑躅の字義
躑躅の種類
晋山世稿の記事　日本に於ける流行
躑躅の名所　夢窓國師と創案
躑躅の品種……二六
躑躅の畫……二八
躑躅の詩……二九
躑躅の歌……三〇
躑躅の名句……三一

一立齋廣重筆　木曾街道洗馬圖

一立齋寛重筆　木曾街道洗馬圖



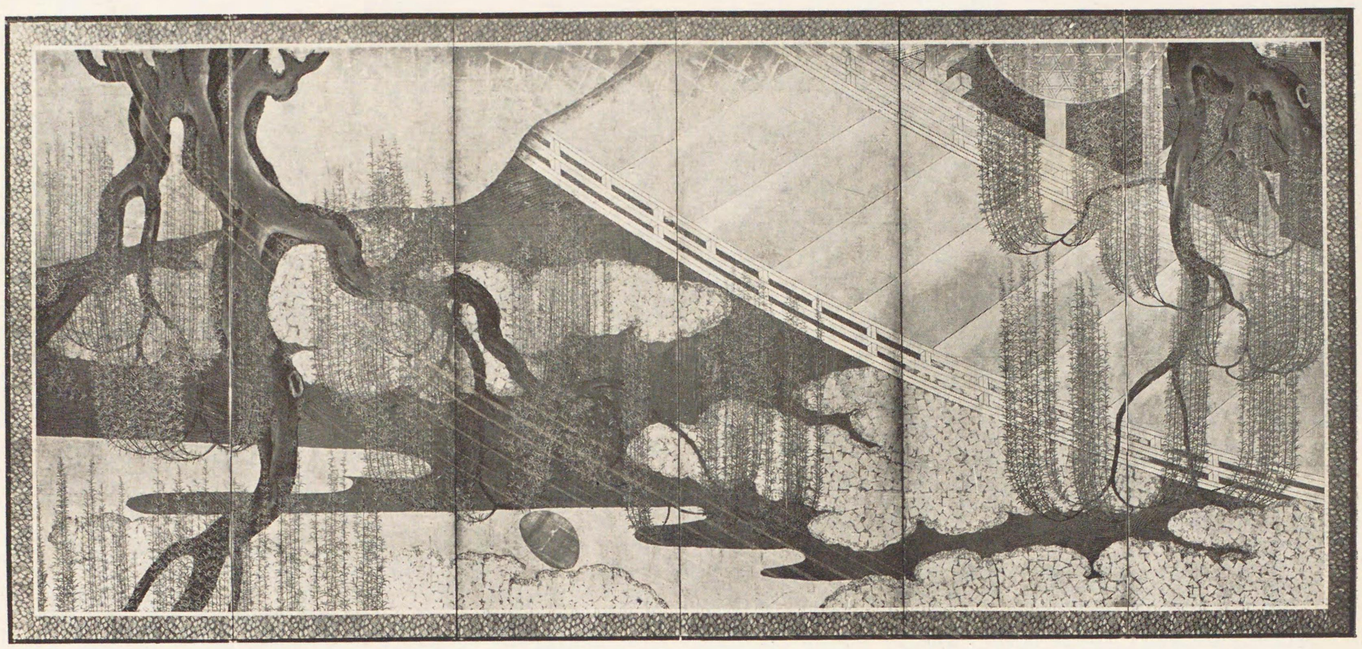
狩野信政筆　柳櫓繪

知恩院藏

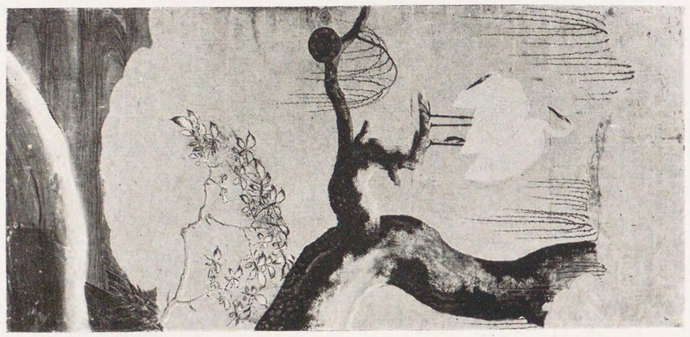
狩野信政筆　柳櫻繪

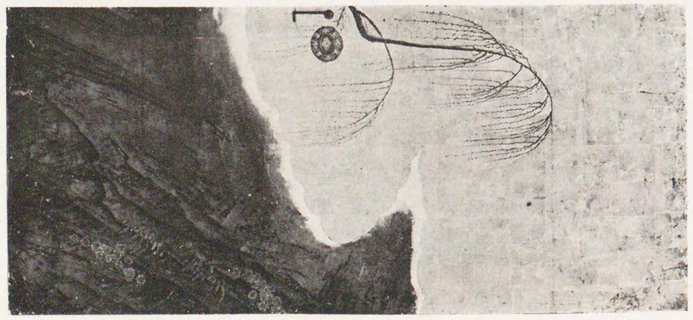
知恩院藏

狩野信政筆　柳襖繪　知恩院藏



（藏家四市）風屏稽治宇





雪中柳鷺襖

山樂筆

柳圖襖繪　山樂筆

柳山水襖繪　傳永德筆

雪柳圖襖繪　傳永德筆

柳堤牧童圖

馬麟筆

柳山水圖

周文筆

春柳雨鴉圖

華山筆

秋柳風鶯圖

華山筆

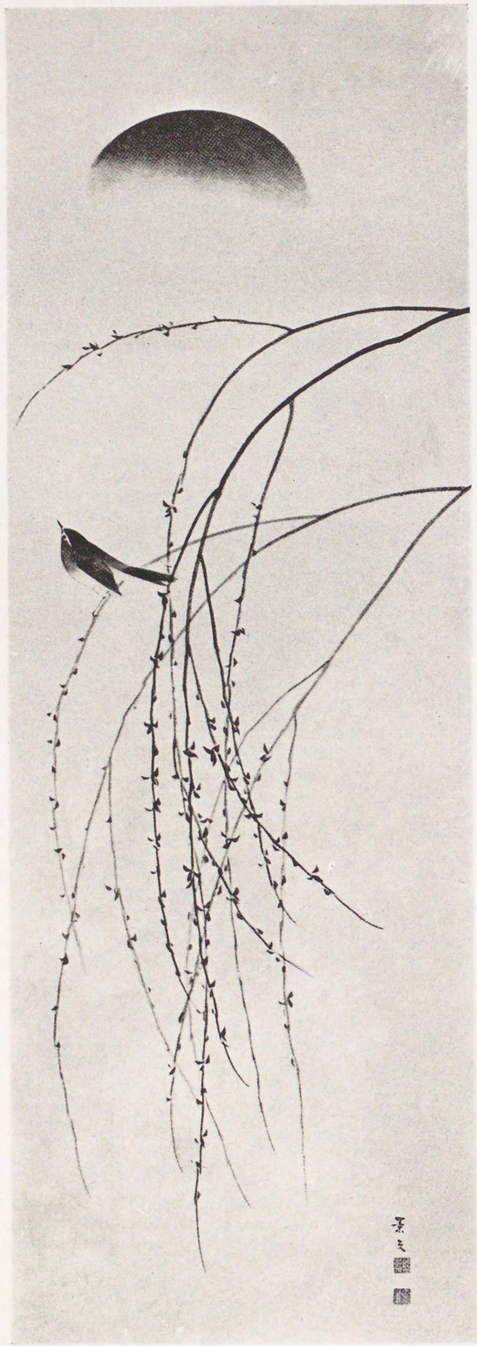
柳燕圖

狩野元信筆

柳蔭書屋圖

菘翁筆

柳蔭騎路圖　　蕪村筆



柳鶯旭影

景文筆

躑躅圖　光琳筆

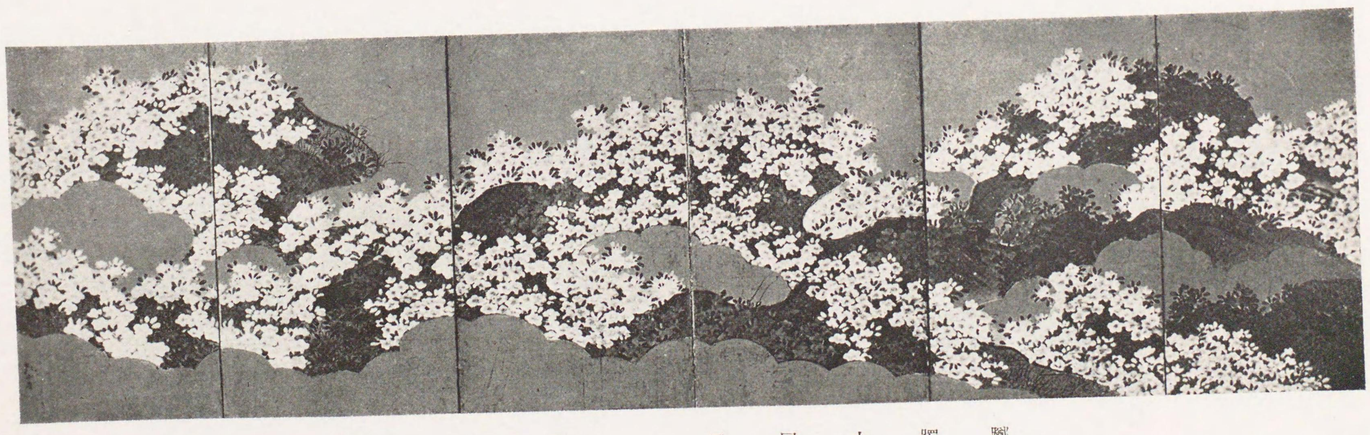
四季草花屏風（六曲の一部）光琳筆

檜に蹴鞠圖

光琳筆

熊に蹴躓圖

圓山應擧筆



躑躅小屏風　　乾山筆

柳　　岡本東洋氏撮影

躑躅　岡本東洋氏撮影

金井紫雲編

藝術資料

第一期植物篇第四冊

柳躑躅

合名會社 芸艸堂刊行

K231
35

柳の概説

柳と一般に呼んでゐるのは、楊柳科の落葉喬木で、支那を原産とする、**しだれやなぎ**のことであるが、廣く楊柳科の植物の總稱ともなつてゐる、元來此の楊柳科の植物は、種類が甚だ多く、全世界に二百種、我が國に丈けでも八十種の多きに達してゐるが、日本では此の科に屬してゐない植物でも、柳の名を以て呼んでゐるものがある、たとへば、薔薇科に屬する**ゆきやなぎ**、鼠李科に屬する**くまやなぎ**の如きそれである。

普通楊柳科の植物には喬木もあり、灌木もあり、雌雄異株で多くは早春の候、葉の出る前に花を開く、花は所謂葇荑花で、穗狀をなし花梗がなく多く集まつて咲く、雄花は三箇乃至多數の雄蕊を以てなり、雌花は一個の子房が一枚の苞に依つて包まれてゐる丈けである果實は蒴果で、熟すれば裂け冠毛に依つて飛散し繁殖する、繁殖力が強く水邊に挿せば容易に活着すること人の知る處である。いま重な種類に就いて記して見る。

しだりやなぎ　枝垂柳と書く、獨搖といふ漢名もある、古く支那から渡來したもので、今日では街路樹、庭園樹として到る處に見られる、枝細く垂れて絲の如く、芽出し頃の景觀が極めて美しいので、所謂『青柳の絲』として古歌などに詠賦せられ、繪畫にもよく畫かれる、葉は披針形で細長く、周圍に鋸齒があり幹の高さは三四丈に達す、葉に先立ちて花を開く、雄花は二雄蕊を有するのみ、色は黄綠色で見るほどのものではない、此の樹の美しさは矢張春の發芽頃にある。

かはやなぎ　水楊、川楊と書く、名の通り原野の水邊などに多く落葉喬木で、葉は互生で、小さい托葉がある、枝垂柳のやうに枝が垂れず、花は株を異にし、何れも單性花を開く、短かい穗狀をなす黄綠色のものである。

ねこやなぎ　これも原野の水邊などによく見る落葉灌木であるが、庭園等にも植ゑられる、高さは漸く五六尺、葉は長橢圓形でやゝ厚く、周圍に細かく淺い鋸齒があり、葉柄の基部に小さい不正形の托葉がある、葉の裏に毛があつて灰白色を呈してゐる、花は穗狀で赤く、これに銀色の毛を密生してゐるので猫柳と稱せられ、生花などに用ゐられ、また繪にもよく畫かれる。

こりやなぎ　行李柳と書く、水邊に多い落葉灌木であるが、葉の對生若しくは輪生である點が以上の諸種と異る、枝は長く伸び、葉は線狀披針形で周圍に僅な鋸齒がある、雌雄株を異にし、春の初め褐紫色の花を開き、矢張り銀毛に蔽はれてゐる、新しい枝が長く伸びるので、これを伐つて皮を去り、行李を製するのは人のよく知る處、但馬の産が聞えてゐる。

おほばやなぎ　柳の種類ではあるが、葉の細い枝垂柳などゝは全く異り、葉は長橢圓形で長さ五六寸にも達する、水邊に生ずる落葉喬木で、花も一寸栗の花に似、雄花は三四寸、雌花は五六寸ほどあり、北海道に多い。

いはやなぎ　岩柳、山地によく見る灌木で

81W57825

葉の形は長楕圓形で三寸位になり、葉の裏面に白毛を生じてゐる、葉の脇から花を生ずるが淡黄綠色で見られるほどのものではない。

きぬやなぎ　原野の濕地に成育する落葉喬木、葉は細長く尖端が細くなつてゐる、鋸齒はなく、互生であるが葉は密生して繁り、その基部に早春の候黄色の花を開く、絹柳といふ名は、此の種、葉裏に白い絹絲のやうな毛を生じ白く見えるので此名がある。

しばやなぎ　山地の落葉灌木で、高さ五六尺に滿たず、葉は長楕圓形で尖り、若い葉には柔かい毛が表裏ともに生へてゐる、花は四月頃開くが、これが熟すると所謂柳絮となつて飛散する。

たちやなぎ　原野の水邊に自生する、名の如く枝は立ち、葉は長楕圓形で、緣に鋸齒が細かく刻み、互生で裏が白い、春異株に單性花を開く、雄花の穗は長楕圓形で、花時は雌花より大きいが、結實すると雄花より雌花の方が長くなる、花はともに黄色である。

はこやなぎ　やまならしとも呼ぶ、ポプラと呼ばれ、白楊の文字を用ゐられてゐる、山地に自生する落葉喬木で、葉は寶珠形を呈し緣邊に鋸齒があり、樹枝は上方に伸び、風の爲めに動かされ易い、四月頃開花し褐色を呈する、材は白味を帶び、多く箱を製作するので、はこやなぎの名がある。

以上は楊柳科に屬する主な柳の種類であるが、園藝的には枝垂柳が幾つかの品種を生んでゐる、元來、支那が原産であるから、彼地に於てもいろ〳〵の名があり、菅茶山の『筆のすさび』の中にも

予が塾に柳三種あり、一は京の下河原に插星櫻とて六如上人の房の庭にありし柳の枝をさせるなり、もと絮綿多かりしが、水土によればにや今は少なし、一は蘇州府の種とて、長崎の德見茂四郎より送り來る、一は蜀柳にて、荒木房五郎より得たり、此柳は西洞院風月入道殿、主上より賜はりしをわかちて平松宗致に給ふ宗致備中松山の人ゆゑ故鄕へもわかち植ゑたるなりといふ荒木は松山人なり予と善し蜀柳は近頃枯たりとある。

今日、柳の品種として數へられてゐるのは、六角堂、文筥、珠柳、繭玉柳などである、六角堂は、その昔支那より舶載したものを、京の六角堂に植ゑたのが、各地方に分布したもので形優雅を以て聞えたもの、文筥はもと支那の西湖からその若木を移し、文人墨客が珍重し、その枝の細く長くして文筥を結ぶに適してゐるといふので此の名があり、一名西湖の柳ともいふ、その昔加賀の千代は此の種を愛し、その屋敷に植ゑて眺めたといふ、珠柳、繭玉柳、また普通の枝垂柳の中に含めらるべきものである。

普通柳を呼んで楊柳といふが、本草綱目には、柳は枝弱くして枝垂るゝもの、楊はその枝の立つ種類をいふとある、故に楊柳科として、これを包含してゐるわけである、この外柳の名を冠するものに檉柳（ぎょりう）がある、これは檉柳科の一科をなし自から異るものである。

楊柳十題

楊柳觀音

楊柳に因むもの〻中で、先づ第一に擧ぐべきは楊柳觀音である、三十三觀音の一にして、觀音、諸機の衆生に應じて慈悲心を垂れ、諸の衆生の願樂するところに應じて、化益すること恰も楊柳の春風に靡きて應ぜざるもの無きが如くである、因つて此の名がある、此の菩薩の形像は、身色、相好等は普通の觀音の通りであるが、右手には楊柳の枝を執り、左手は乳の上にあつて、大慈悲の體をなしてゐるのを特色とする。諡曲『遊行柳』に『そのかみ洛陽や、清水寺のいにしへ、五色に見えし瀧浪を尋ねのほりし水上に、金色の光さす、朽木の柳忽ちに楊柳觀音とあらはれ』云々とあるのが有名である、古來、佛像として畫かるゝもの極めて多く、京都大德寺には傳吳道子筆の名作があり、近江來迎寺の筆者不明の楊柳觀音亦名高く、南禪寺には、牧谿筆の素晴しい名作があり、近くは橋本雅邦よくこれを畫いてゐる。

五柳先生

五柳先生とは、『歸去來辭』で有名な陶淵明の別號である、陶淵明といへば酒を愛し、菊の隱逸を樂しんだ大詩人、晉の哀帝の興寧三年、潯陽の柴桑、卽ち今の德化縣楚城市に生る、淵明はその名で、字は元亮、昭明太子と もいうた、博學にして詩をよくし、宋の武帝に召されて著作佐郎となつた、その初めて詩を作つたのは晉の隆安四年、淵明三十六歲の時であつたといふ、義熙元年四十一歲の時には、彭澤の令となつたが、僅か八十五日で辭してしまひ故山に歸つて文藻を事とした、その性、恬淡にして無欲、清貧に安んじて唯これ酒を愛した、その作る處の詩中に酒の字を多く見るのを見てもその生活が知られる、宋の文帝の元嘉四年、卽ち我が朝の允恭天皇の十六年、六十三にしてその大なる生涯を終つた、時人諡して靖節先生といふ、その官にある日、歲の終りに際し郡督郵を遣はし縣に到らしめた、その時縣吏束帶して之を迎ふべしといふたのが癪に障つて、官を辭し故國に歸つてしまつた、その時作つたのが歸去來辭である、その家の周圍には五株の柳を植ゑ、その莊を五柳莊と名づけ、自から五柳先生と呼び、『五柳先生傳』を書いた、その傳に曰く。

先生不知何許人也、亦不詳其姓字、宅邊有五柳樹、因以爲號焉、閑靜少言、不慕榮利、好讀書、不求甚解、每有會意、便欣然忘食、性嗜酒、家貧不能常得、親舊知其如此、或置酒而招之、造飮輒盡、期在必醉、既醉而退、曾不吝情去留、環堵蕭然不蔽風日、短褐穿結、簞瓢屢空、晏如也、常著文章自娛、頗示己志、忘懷得失、以此自終。

贊曰　黔婁有言、不戚戚於貧賤、不汲汲於富貴、極其言、茲若人之儔乎、酣觴賦詩以樂其志、無懷氏民歟、葛天氏之民歟。

陶淵明は道釋人物中、好個の畫題として、古來いろ〳〵に畫かれてゐるが、近頃では下

村靚山にその大作がある。

定家卿と柳

百人一首の選者として、藤原定家卿の名はあまりにも高い、俊成卿の子にして世に京極中納言といふ、治承壽永の間に、正五位下に叙せられたが、文治元年、殿上で源雅行と爭ひ、燭を以て之を打つたので、除籍されてしまつた、父俊成歌を以てこれを諷したが、このこと後白河上皇の上聞に達し、上皇愍み給ひ位を舊に復したといふ、和歌の道に堪能で手蹟また美事であつた、天福二年祝髪し、仁治二年薨じた年八十、その趣味廣く、殊に草木を愛すること深く、殊に柳は最も好むところであつた、その晩年、鬱勃の氣を慰むるは唯柳あるばかりであつた、だから、その『明月記』の中には、『雨中對花柳悲棧涯』といひ、また『終日無事對垂柳』と記してゐる、その冷泉の邸には、よく柳を植ゑて眺めて暮した、定家卿を寵愛せられた、後鳥羽上皇は特に定家卿に向つて、その邸中の柳を御所望遊ばされた、定家卿、身にあまる光榮と、卽ち二株の柳を獻上したが、叡感斜ならず、柳は冷泉の邸から畏くも九重の雲深き仙高陽院殿に移し植ゑられたのである。彼はこれをその『明月記』の中に記して曰ふ。

建暦二年二月二日、去月廿五日刑部卿中將兄弟依院宣、入蓬門切庭柳二本許、立高陽院殿御庶云々、過清範朝臣示面目之由、是大宮大納言吹擧云々、但末世之法、草木猶如此、開元一株之柳、難期奥慶之春歟と、建保元年にも、上皇の御意によつて柳樹二本を商陽院殿に獻じた、其條に曰く

建保元年二月廿八日、別當微行入蓬門、見柳樹二本、可掘渡商陽院由、被命青侍云々、仍以使者、雖示返事、閉門無音空歸。

と、その如何に深い愛着を柳に寄せてゐたかゞ窺はれる。

隋堤の柳

『白氏文集』にある有名な詩で、これが『源平盛衰記』の第十七巻に載せられてゐる、曰く

昔隋煬帝、片河の岸に柳を植る事一千三百里、河水に龍舟を泛べ、船の中に伎女を乘せて永く萬機の政を忘れて、偏へに佚遊を恣にしたまへり、紫髯の朗將は錦の纜をまふり、青蛾の御女は紅樓にあそびけり、海内の財力を盡す、百姓大に泣き悲しみ、萬國忽ちに亂れて、諸侯權を諍ひければ、大唐の李淵軍を起して煬天子を亡ぼしゝかば、隋の代、永く絶えにけり、去れば上政を忘るれば、下必らず苦しむ、上下道調らざれば、國の勢久しからじ、故に宗社之危事如縷旒とは云ふなるべし、福原の遷都の事天下の煩、海内の歎也、當家他家の公卿殿上人より、上下の北面に至るまで、人並々には下りたれども、一人も安堵の思はなし、常は心騒ぎしてぞ有りける。

柳の御所

壽永二年九月、平家追討の勅使が伊勢大神宮へ立てられてからは、今までの榮華も何處、一門は遙々九州に落ちて行つた、その誓しの御所として主上安徳天皇の着かせ給うたのは豊前國柳といふ處であつた、『盛衰記』はこの悲劇を左の如く記してゐる。

去る程に主上御駕輿丁なければ、玉の御輿をも不奉、御伴の公卿殿上人は奴袴の傍を取、女房北の方は、裳唐衣泥に引き、いつ習ひたるにはあらねども、畏しさの餘に悲き事も覺えず、かちはだしにて我先に〳〵と箱崎の津に逃給ひけるぞ無慙なる、折節降雨は車軸を下し、吹風は砂を上ぐ、落る淚雨に諍ひて何とも不見分鳥に不有ば天をも難翔、龍に有らざれば雲にも上り難し、新羅百濟へも渡らばやとは被思けれ共、波風荒うして夫も心に任せねば、各々袂を絞けり、箱崎津も難始終叶ければ、是より又兵藤次秀遠に具せられて、筑前の國山鹿の城へぞ入らせ給ふ、菊池次郎高直をば、大津山の關あけて進らせよとて、先立て通したりけれ共、此事終にはかゞ〳〵しからじと思て、高直心替してけり、原田大夫種直も、山鹿城へ入らせ給ひければ、秀遠が下知に相從はん事、子孫に傳へて心憂しと思ひ、則ちそれも心替してけり、山鹿城にも未だ御安堵なかりける處に、惟義十萬餘騎にて押寄すると聞えければ、又取物も取敢へず、山鹿城をも落させ給ひて、たかせ舟に乘移り、豊前國柳と云ふ所へ渡入らせ給ひけり、澤邊の蟲は聲弱り、磯打浪に袖濡す、柳と云ふ所に着かせ給ひたりけるに、楊梅桃李を引植ゑて九重の都に少し似たりければ、薩摩守忠度のかく

都なる九重のうち戀しくば柳の御所を立よりて見よ

主上女院を始め進らせて、內府以下の人々豊前國宇佐の宮へ有參詣、社頭は皇居となり廊下は月卿雲客の居所となる、五位六位の官人等大鳥居に候ひ、庭上には九國の輩弓箭甲冑を帶して竝居たり、ふりにし緋の玉垣、歳經にけりと苔むして、いつも絲の柳葉に、木綿四手懸て隙ぞなき、御祈誓の趣は、主上舊都還幸也、都は無に隔てゝ雲の徐に成りぬ、何事につけても心盡しの旅の空、身を浮船の住居して、こがれて物をぞ覺しける。昔は女昔は在原業平が隅田河原の邊にて、都鳥に事問淚を流しけん も又かくやと覺えて哀れなり。

柳の船

船の起源には、水の面に流れる柳の葉に蜘蛛が乘つて難なく川を渡つたのを、貨狄といふものこれを見て、初めて船を案出したといふことになつてゐる、これを諧曲の『自然居士』の中に記してゐる。

「抑も船の起りを尋ぬるに、水上、黄帝の御字より事起つて「流れ貨狄が謀より出でたり」「こゝに又蛍无といへる逆臣あり」「彼を亡ぼさんとし給ふに、烏江といふ海を隔てて、攻むべき樣もなかりしに「黄帝の臣下に、貨狄といへる士卒あり、ある時、貨狄庭上の、池の面を見渡せば、折節秋の末なるに、寒き嵐に散る柳の、一葉水に浮かびしに、又蜘蛛といふ蟲、是も虚空に落ちけるが、其一葉の上に乘りつゝ、次第次第にささがにの、いとはかなくも柳の葉を、吹きくる風に誘はれ、汀に寄りし秋霧の、立ちくる蜘蛛の振舞、實にもと思ひそめしより、巧みて舟を造れり、黄帝是に召されて烏江を漕ぎ渡りて、蛍尤を安く亡ぼし、御代を治め給ふ事、一萬八千歳とかや「然れ

ば舩のせんの字を、「公に前むと書きたり、扨又天子の御顔を龍顔と名付け奉り、舟を一葉と云ふ事、此の字より始まれり。

柳の井

『江戸名所圖會』には、柳の下にあるこけ蒸した石の井戸から泉が吹き出してゐる傍に編者月岑とも見られる一本差の品のよい人と畫者雪旦とも見られる、圓頂の人物とが描かれてゐる、あたりは漫々たる堀の水、柳の影にはさぎが舞つてゐる。

參謀本部の前の線路を越して、岸を堀の際まで降りてゆくと、柳も井戸も雪旦の繪をそのまゝに、つい頭の上の街路には電車もはしれば、自動車も通る、けたゝましい爆音を立てゝオートバイが疾走する、それが現か、これが幻か、遠い鎌倉や逗子よりも手近いここいらの方が遙かに塵外の境である。井戸のほとりに立つ標石には、表に柳の井戸と刻み、側面には明治四十一年四月修覆

江戸名所圖會所載

柳の江戸

此所の井を柳の井と號るは、清水流るゝ柳蔭といへる古歌の意を取りてしかいふとなり。

と記してゐる、直ぐ近くにある櫻の井は塞がれて昔の面影を見る由もないが、柳の井はかうして江戸時代の姿をそのまゝに遺してゐる。

東京市技手集堂鏡太郎とある。—鏑木清方氏—濠端風景—

これは清方氏の文である、名所圖會に依ると、今の三宅坂は清水坂と呼んだらしく、柳の井に關しては唯

六角堂

柳の品種の中で、名の聞えてゐるのは六角堂である、小野妹子が花道を創始したといふ六角堂池の坊には、古く柳の名木があつて、世に所謂六角堂柳は、此の柳の分れであるといふのである、併し、親木の六角堂柳は、既に跡方もなくなつてゐるのである、文化頃出版された小泉保敬の『保敬隨筆』に次の如く記されてゐる。

六角堂門内大木の柳、この大風に倒れて、わづかにその株のみのこれりこの樹、享保二年再板の年代記、元祿元年四月の處の繪に見えたり、予、幼年のとき、みるところと少もかはることなし、今よりは凡四五十年の昔、やゝ古木と見えたり、此等に柳の木の多かりし趣は、本願寺元祖聖人の傳畫にも見えたり、觀音

の緣によるものか。

柳絮

楊柳は春になると、葉の出る前に暗紫色の花を開き、實を結ぶ、此の實が綿のやうになつて風に飛ぶ、その飛ぶさま、丁度雪のやうなので、古來よく詩人の詠賦する處となつてゐる、支那、滿洲では多く是れを見、その綿を集めて褥に作つたりするが、日本でも下總の手賀沼邊ではこれを見ることが出來る、王維の『酬郭給事』の詩中に曰く

洞門高閣靄餘暉、桃李陰々柳絮飛。

と、近頃は俳句にもこれを吟じてゐる。

柳絮飛ぶや江舟岸をすれ〳〵に　幸叢
峽舟や柳絮飛び去り飛び來たり　雨意
香煙に來ては去りゆく柳絮かな　三昧

など何れも支那の景色である、繪では長野草風氏にその作がある。『臆乘』に曰く。

柳花與二柳絮一迥然不同、生二於葉間一成二穗作一者黑、者花也、花既褪、就帶結實、其實之熟、鵝飛如二綿者一絮也、古今吟味、往々以二絮爲一花、以花爲絮、素無二分別一、可發二一笑一、杜工部詩、有二雀啄江頭黃柳花一、又有二生憎柳絮白一於綿一之句一、則花與絮不同、顯然可見、又曰、縈徑楊花鋪二白氈一、得非又一時歟而然耶。

柳營

古美術に柳營御物がある、卽ち將軍家の所藏である、柳營といふのは、將軍の營のこと、その出所は、周亞夫の故事に基く、文帝の俊六年匈奴がその邊境を襲うた、卽ち宗正劉禮を以て將軍となし、霸上に軍し、祝茲侯徐厲を將軍として、棘門に軍し、河内守亞夫を以て將軍となし細柳に軍し、以て故に備へた、會々帝自から、軍を勞はらうとして先づ霸上と棘門に向つた、將士以下皆これを迎へたが、細柳に至ると、軍士吏皆武裝して入るを許さない帝の先驅先づ至り、これを詰ると、將軍の令を聞くも、天子と欲すと、亞夫卽ち門を開いて迎へたが、門衞が亦、軍中に驅馳を許さぬというた、そこで文帝は自から馬の轡を按じて徐行し、漸くにして營中に至つた、將軍一禮して曰く、軍中は軍中の禮を以て迎ふと、帝、將軍を勞ひ、禮を成して去つた、既にして軍門を出づるや群臣皆驚いたが、文帝の曰く、これ眞の將軍であると、將軍の營をこれから柳營と呼ぶやうになつた。

—漢書周勃傳—

顧愷之と柳

晉書曰、顧愷之癡信二少術一、桓靈寶嘗以一葉柳給之曰、此蟬翼葉也、以自蔽、人不見、己愷之引葉自蔽、靈寶就溺焉、愷之信不見益珍重之、俗傳愷之有三絕、此癡之一絕。

—淵鑑類函—

柳江種柳圖

柳子厚、柳州の刺吏たる時、柳江といふ所にて柳植たる體なり、柳州柳刺吏種柳柳江邊云々

—後素集—

柳の名畫

宇治橋屏風　市田彌三郎氏藏

柳の名畫と稱せらるべきもので、先づ第一に思ひ出されるのが、此の宇治橋屏風である此の種のものは他にも數種あるが、所謂桃山百双中の一として、その構圖の典雅なる中にも雄大なるのは流石に豐公一世の好尚丈けあり、そして永德や山樂に依つて大成された障壁畫の代表の一つとして推すべきものである、金箔の地の上に、橋や蛇籠や水車など皆盛り上げとし、月と水とは銀泥描きであり、更に雲や土破には金砂子を蒔いてゐる、橋は宇治橋であり、左半双には水車があつて淀を象徴してゐるのであらう。柳の描寫は殊に面白く、技巧の限りを盡してゐる。

雪中柳鷺襖繪　京都　智恩院藏

智恩院大方丈の鷺の間の襖繪で、筆者は狩野信政といはれてゐる、信政は狩野祖信秀家の長子で、東福門院の畫師であつたといふ、襖は十六枚に亙る大作で、雪降り積る幹、糸の如き細枝、その枝を八方に伸し、これに白鷺を點出した雄大な構圖、金地に着彩といふ絢爛を極めたもので、その柳の枝の線を見てゐると、胸のすくやうな思ひがする、幹の上の雪の技巧にも鋭い感覺がほの見えてゐる、柳の名畫中逸することの出來ぬものである。

雪中柳鷺襖繪　京都　天球院藏

天球院の襖は我が障壁畫の中で、特筆すべきものであるが、此の柳鷺の如き、亦優れたものである、筆者は狩野山樂で、西の間にあり、これに續いて直ちに雪梅の圖となつてゐる、金地の中央に岩壁を見せ、右は梅となり左は雪柳となつて巧みにその間を霞で區切り柳の幹には二羽の白鷺をとまらせ、下には水を描き竹を配し、小鳥が二三羽飛んでゐる、如何にも閑寂な氣分の出で、然も筆は雄勁を極め、構圖は何處となく雄大で、筆者の氣魄を窺はしめるものがある、柳の名畫中、屈指の逸品である。

柳圖襖繪　醍醐　三寶院藏

三寶院の襖繪の中で、柳の間は殊に傑出してゐる、筆者は山樂と傳へられてゐるのであるが、近頃等伯說が有力となつてゐる、砂子や切箔を極めて效果的に使用してゐる點、筆の雄勁にして暢達せる、全く特殊の存在であるといつてよい、殊に遠棚のある壁面の幹の描寫の如き、謹嚴にして冒すべからざるものがある。

柳山水圖襖繪　京都　聚光院藏

柳を畫いた山水の障壁畫としては、先づ此の聚光院の國寶襖繪を擧げねばならない、中央風にその枝を靡かせる柳の老樹を描き、その蔭に人家點々として散在し、下には海が迫つて網干す濱となり漁から歸る漁夫二人を點出してゐる、永德筆と傳へられてゐるが、松榮に近い畫風で、畫面が如何にものびく〳〵してゐる。

雪柳襖繪　京都　西本願寺藏

西本願寺滴翠園内柳の間の襖繪も柳の名作として推すべきもの、筆者は永德といはれてゐるのであるが、三本の老柳を描き、その枝

は思ひのまゝに伸びて水に垂れ、水はその奥を金雲の間に潛ませて、微妙なる波の線を現はしてゐる、幽寂極りないもので、絢爛華麗目を驚かす障壁畫の中で、一異彩を放つものといへやう。

馬麟筆柳堤牧童　川崎家舊藏

老柳枝を交へて天に沖し、先は糸の如く垂れて風に靡く、牧童あり、牛を追うて堤上を行く、一見平凡な構圖であるが筆致幽玄にして敦厚、よく東洋畫の精粹を發揮してゐる、馬麟は馬遠の子、その畫技は遠く父に及ばなかつたので馬遠は馬麟の作におのが名を入れて世に出した爲め馬麟の作が名高くなつたといふ、併し此の作の如き立派なものである。

周文筆柳山水　同

周文筆の柳山水としては大作に屬する、中央土坡の上に、四株の老柳を畫き、下に水あり、蘆荻を生じ、後方に峻岳肩を並べてそゝり立つ、豪宕なる構圖。然もその柳の描法の如き、山岳の颯と引いた筆の勢ひとは亦變つた纖細な技巧を以て一々その葉を添へてゐる柳の描法も古來いろ〳〵あるが、此の周文の筆の如きは極めて著しい特長あるものといへやう、縱四尺一寸幅二尺三寸の大幅で『周文筆法眼永眞誌之』と書かれてゐる。

華山筆春柳雨鴉　小坂順造氏舊藏

華山の作中大作に屬するもので、秋柳風鶯と對幅を爲してゐる、春の柳と秋の柳とを對照せしめて、各よくその特長をあらはし、春柳は雨として、これに八羽の鴉を配し、秋柳は風に靡く風情を畫いて好個の對照を爲す、落款に華山邊登とあり三十歳前後の作と推定さる。その構圖の妙、蓋し柳の作中での異彩であらう。

元信筆柳燕圖　越前松平家舊藏

元信は矢張狩野派の棟梁である、其の筆致雄勁にして、然も悠暢迫らず、花鳥山水共に傑出してゐる、この作は、越前松平家の什寶として傳へられたもので、中は大黒天、右が唐桑に鵯、左が此の柳燕であるが、枝條の氣持のよい伸び方、飛んでゐる燕の輕快な姿、幹にとまつて空を見る一羽の活躍、三段に見せた柳の姿、總て畫面の均衡がよく取れて間然する處がない、何處かどつしりとして大家の貫祿を示してゐる。

蕭翁筆柳蔭書屋　藤田男爵舊藏

柳桃山水、柳蔭歸漁、柳蔭書屋、かうした畫題はよく南畫に見る處、柳は單に花鳥畫としても山水にしても面白い樹木である、この柳蔭書屋は、翁の作中でも力作に類するもの、溫雅なる山容、點々たる楊柳、その間の書屋如何にも長閑な情景である、蕭翁の如き世外の畫人にしてこそよく爲す處の畫題である。蕭翁、姓は貫名、名は苞、字は君茂、阿波の人で、書畫共によくして、書に於ては近代第一人と稱せらる、畫は初め狩野派を學んだが、明の錢穀の帖を見るに及んで飜然として悟る處あり、爾來明畫の研究に努めたといふが、畫風は純然たる南畫である、晩年蕭翁と號したのは、京に住んで、田園の風趣を喜び、自ら前栽に蕭を植ゑこれを拔くを快としたと、貫名を拔萃と讀ませた洒落である。

蕪村筆柳蔭騎路　横江竹軒氏舊藏

蕪村は柳の畫家である、柳を愛し柳を畫くこと、古來蕪村の如きは少い、然も彼の柳は唯に花鳥としてのみでなく、その柳の山水の

中にはいつも生活を織込んでゐる、魚籠を提ぐる漁夫、馬を牽く農人、牛を追ふ牧童、悉くその筆にのつてこゝに新しき生命が賦與される、こゝに掲げた柳蔭騎路は、蕪村の畫いた柳の作中でも大作に屬し、竹林茅屋と中屏風一双を爲すもの、蕪村が飛驒の高山の舊家某家の爲めに揮毫したものといはれてゐる、竹林茅屋の方には

獨木爲橋過小村、茂竿修竹護柴門、白頭不知王侯事、閑把牛經教子孫、謝寅書於雪堂

と記し、此の柳蔭騎路の前には

江雨霏々江草齊、六朝如夢鳥空啼、無情最見臺城柳、依舊煙籠十里堤。

右過金陵韋莊蕪村書

と記してある、昭和十年賣立に現はれ十三萬で落札した。

景文筆柳鶯旭影　双軒庵舊藏

四條派の作品としては、此の一點を掲けたこれは松本双軒庵の舊藏で、景文が生涯の中最も會心の作として自から推奨した作、中に水墨を以て富嶽を畫き、右は卽ち此の柳鶯旭影であり、左は小禽紅樹として、眞紅に染めた楓に四十雀一羽を配したもの、柳の綠に鶯既に好個の對照である、然も此の三幅の色彩の配置は動かすことの出來ない妙味を發揮してゐる逸品である。

木曾街道洗馬　一立齋廣重筆

廣重の風景版畫の中には、柳を畫いたものが相應にある、名所雪月花の多滿川秋月、京都名所の八瀬の里、江戸名所の衣紋坂などそれ〴〵に廣重としての特長があるが、一番興を惹くのが、木曾街道六十九次の中の洗馬である、野風に吹き曲けまげられた柳幾株、その枝の間には既に夕月がまん圓く現はれて、あたりの光景はしづかに、水邊に棹さす柴舟は、音もなく、その柳と月の下を辷つてゆく、そこに限なき詩が潛んでゐる、庄野の竹林、唐崎の夜雨などと共に廣重の作中、最上位に置くべきものである。

長生殿蒔繪手筥　川崎家舊藏

梅と柳を手一杯に蒔繪であらはし、上には七羽の小禽が舞ひ二羽は梅の枝にとまつてゐる、磨き出しの地に、梅や柳の輪廓の線が面白く、土地の上に峯あり、峯の上に長生殿の文字を現はしてゐる、見返しは同じく梅と柳であるが、此の組合せがまた非常によく出來てゐる。此の長生殿の蒔繪と同巧異曲なのが大倉集古館の扇面散の手筥中蓋で、これには長生殿裏春の文字が現はしてある。

柳文方鏡　香取秀眞氏藏

柳文の方鏡は慶長頃の作といふ、極めて簡粗な構圖であるが、右の枯幹と左の幹と向ひ合せになつてゐる處と、下の土坡が中々趣きがある、右下の天下一の文字が、自然畫になつてゐるのも妙味がある。

柳文志野平鉢　北大路魯卿氏舊藏

魯山人氏蒐集品中の異彩で、平鉢の見込に柳を見せたもの、その手法が如何にも簡單でそれでゐてしつくり形にはまつてゐる、周圍の模樣なども巧まずして、何處にか捨てられぬ好味がある。

堆朱柳下人物盆　紀州德川家舊藏

大明張成作といふ、木瓜形で周圍が花模樣、中に山水人物を見せた、池中に島あつて柳あり、樓閣には高士と唐子が彫刻されてゐる、如何にも大明を思はせる精緻なものである。

柳の畫題

柳の畫かれたもので、昔から傳へられる謎語畫題や、名數畫題は、その割合に多くない左に解說を附して列記する。

一路功名　柳に鷺を畫く、路は鷺と字音相通ずる丈けのこと、一筋に功名榮達を求むといふこゝろ、柳の枝は一筋に進む意を寓すものである。

一路榮華　鳥は鷺と翡翠、植物は柳と芙蓉である、鷺は路に字音相通ずること前者の通り、蓉華は榮華と同字音此の際柳は添景である。

疎柳三思　冬の柳に鷺三羽の思ひ〳〵の姿してゐる處を描く、昔からよく畫かれてゐる、構圖としても面白い。

浪暖桃香　植物は柳と桃、これに鴛鴦を畫く鴛鴦の相睦みあふ風情に、春暖の意を柳と桃によつて寓せるもの。

桃柳賜宴　桃花に柳を配し、これに燕を飛ばせる、いふまでもなく、宴の字音燕と通ずるを以てである、構圖も春にふさはしい。

桃柳舞鴨　桃と柳の枝を交ふあたりに鴨の飛ぶ圖、陸治の詩に

二月吳松水上灘、柳絲風急絮漫々詩翁賦罷閑凭處、花滿春池鬪鴨欄

とあるの意。

柳鶯便面　柳の枝に鶯のとまつてゐる處を畫いたもの、唐肅の詩に

新垂柳葉不禁吹、鶯語如歌出鳳池閶闔門西朝退日、會於馬上聽多時

の詩意がそれである。

柳浪鬪鷺　西湖十景の一、西湖は支那浙江省湖山の勝地と稱せらる、柳浪鬪鷺は將にその一である。

錢塘八景の一、錢塘は江の名、浙江省の北半を流れる、源を仙霞嶺に發し杭州の東方で三角江をなし、杭州灣に注ぐ、これに八景を選んだもの、六橋烟柳の外、九星雲松、靈石樵歌、冷泉猿嘯、葛嶺朝暾、孤山霽雪、北關夜市、浙江秋濤とす。

柳桃山水　楊柳と桃花とを配したる春景山水にして、綠と紅の配合面白く、南畫家の好んで畫くところ、竹田の作に殊に多い。

柳灣歸漁　老柳の下に、漁翁が獲物を提げて歸るの圖、蕪村などによくこれを見る。

柳蔭洗馬　同じく柳の蔭に馬を洗ふ圖で、南畫の好畫材、古來いろ〳〵の人に依つて畫かれてゐるが、矢張蕪村に佳作がある。

橋柳圖　桃山百双屏風などによくこれを見る、橋の袂に柳を描きその枝を伸ばしてゐる、時に水車など添へたのもある。

柳燕柳鷺　柳に燕、柳に鷺で今更說明の要もない。

謡曲『遊行柳』

『遊行柳』は信光の作で、遊行上人の法力によつて、柳の精まで成佛するといふ筋、文章の典雅、筋の幽玄なのを以て聞えてゐる。

前シテ　老人　　ワキ　遊行上人

後シテ　柳の精　　處は　陸奥

「歸るさ知らぬ旅衣、法にこころやいそぐらん」是は諸國遊行の聖にて候ふ、我一遍上人の教へを受け遊行の利益を六十餘州にひろめ、六十萬人決定往生の御札を、普く衆生にあたへ候ふ、此程は上總の國に候ひしが、是より奥へと志し候ふ、「秋津州の、國々めぐる法の道、まよはぬ月もひかりそふ、心のおくを白河の、關路ときけば秋風も、たつ夕霧のいづくにか、今宵は宿をかり衣、日も夕暮になりにけり、「急ぎ候ふ程に、音にききし白河の關をもすぎぬ、又是にあまた道の見えて候ふ、廣き方へ行かばやと思ひ候ふ。

「のう〳〵遊行上人の御供の人に申すべき事の候ふ、「遊行の聖とは、札の御所望にて候ふか、老足なりともいま少し急ぎたまへ、「有り難や、御札をも賜はり候ふべし、まづ先年遊行の御下向の時も、古道とて昔の街道を御通り候ひしなり、されば昔の道を教へ申さんとて、はる〳〵是までまゐりたり、「ふしぎやさては先の遊行も、此道ならぬ古道を、とほりし事のありしよのう、「昔は此道なくして、あれに見えたる一村の、森のこなたの河岸を、御通りありし街道なり、其上朽木の柳とて名木あり、かゝる尊き上人の、御法の聲は草木までも、成佛の緣ある結緣たり。「こなたへ入らせたまへとて、老いたる馬にはあらねども、道しるべ申すなり、いそがせ給へ旅人、けにさぞな處から、人跡たえて荒れはつる、蓬生かるかやも、みだれあひたる淺茅生や、袖に朽ちにし秋の霜、露わけ衣來てみれば、昔を殘す古塚に、朽木の柳枝さびて、影踏む道はするもなく、風のみ渡るけしきかな。

「是こそ昔の街道にて候へ、又是なる古塚の上なるこそ、朽木の柳にて候ふ、よく〳〵御覽候へ、「さては此塚の上なるが、名木の柳にて候ひけるぞや、けに川岸も水たえて、河そひ柳くちのこる、老木はそれとも見えわかず、蔦葛のみはひかかり、青苔梢を埋む有樣、誠に星霜年舊りたり、さていつの世よりの名木やらん、くはしく語り給ふべし、「昔の人の申しおきしは、鳥羽の院の北面、佐藤兵衛憲清出家し、西行ときこえし歌人、此國に下り給ひしが、水無月なかばなるに、此河岸の木のもとにしばし立ちより給ひつゝ、一首を詠じ給ひしなり、「謂(いはれ)をきけばおもしろや、さて〳〵西行上人の、詠歌はいづれの言の葉やらん、「六時不斷の御勤めの、ひまなき內にも此集をば、御覽じけるが新古今に、「道のべに、清水ながるゝ柳陰、しばしとてこそ立ちどまり、すゞみとる言の葉の、末の世までも、殘る老木はなつかしや、かくて老人上人の、御十念を賜はり、御前をたつと見えつるが、朽木の柳の古塚によるかと見えて失せにけり。

「ふしぎやさては朽木の柳の、我にことばをかはしけるよと、「思ひの珠の數々に、御法をなして稱名の、聲うち添ふる初夜の鐘、月も曇らぬよもすがら、露をかたしく、袂かな。

「沉水纖紋海燕かへる、柳條うらみをひいて荊臺に至る、徒に朽木の柳時を得て、「今ぞ御法にあひ竹の、「直にみちびく彌陀の教へ、「衆生稱念必得往生の、功力にひかれて草木までも、佛果に至る老木の柳の、髮も亂るゝ白髮の老人、忽然と顯はれいでたる烏帽子も、柳さびたる有樣なり。

「ふしぎやな、さも古塚の草深き朽木の柳の木の本より、其樣化したる老人の、烏帽子狩衣を着しつゝ、顯はれ給ふはふしぎなり、「何をか不審し給ふらん、はや我姿はあらはしぎぬの、日も夕暮の道しるべせし、其老人にて候ふなり、「さては昔のみちしるべせし、人は朽木の柳の精、「御法の教へなかりせば、非情無心の草木の、臺にいたる事あらじ、「中々なりや一念十念、「唯ひと聲の內に生るゝ、「彌陀の教へを、身にうけて、「此界一人念佛名、西方便有一蓮生、但使一生常不退、此花かへつてここにむかひ、上品上生に、至らん事ぞうれしき。

「釋迦すでに滅し、彌勒いまだ生ぜず、彌陀の悲願を頼まずは、いかで佛果に至るべき、「南無や瀧濁歸命頂禮、本願いつはりましまさず、超世の悲願に身を任せて、他力の船に法の道、「すなはち彼岸に至らん事、一葉の船の力ならずや、彼黃帝の貨狄が心、聞くやや秋吹く風の音に散りくる柳の一葉の上に、蜘蛛の乘りて、ささがにの、糸引き渡る姿より、たくみいたせる船の道、これも柳の德ならずや、「其外玄宗華淸宮にも、宮前の楊柳寺前の花とて、詠め絕えせぬ名木たり。「そのかみ洛陽や、淸水寺のいにしへ、五色に見えし瀧浪を、尋ねのぼりし水上に、金色の光さす、朽木の柳忽に、楊柳觀音とあらはれ、今に絕えせぬあとゝめて、利生あらたなる、歩みをはこぶ靈地なり、されば都の花盛り、大宮人の御遊にも、蹴鞠の庭の面、四本の木陰枝たれて、暮にかすあるの音、「柳櫻をこきまぜて、錦をかざる諸人の、花やかなるや小簾のひま、洩りくる風の匂ひより、手飼の虎の引綱も、ながき思ひにならの葉の、其柏木の及びなき、戀路もよしなしや、是は老いたる柳色の、狩衣も風折も、風にたゞよふ足もとの、よわきもよしや老木の柳、氣力なうしてよわ〳〵と、立ちまふも夢人を、現とみるぞはかなき、「敎へうれしき法の道、「迷はぬ月につれてゆかん「靑柳に、鶯つたふ羽風の舞、「柳花苑とぞおもほえにける、「柳の曲も歌舞の菩薩の、舞の袂をかへすゞ〳〵も、上人の御法を受け、よろこぶ報謝の舞も、是までなりと名殘の涙の、「玉にもぬける春の柳の、暇申さんとゆふつけの鳥もなき、「別れの曲には、「柳條をわがぬ、「手折るは靑柳の、「姿もたをやかに、「むすぶは老木の、「枝もすくなく、「今年ばかりの風やいとはんと、ただよふ足もとも、よろよろよわよわと、倒れ臥柳、かりねの床の、草の枕のひと夜のちぎりも、他生の緣ある上人の御法、西吹く秋の風うちはらひ、露も木の葉も散り散りになり果て〳、殘る朽木となりにけり。

遊行上人　時宗の開祖一遍上人のこと、上人俗姓を河野と呼び、伊豫の人河野通廣の二子、幼にして入道し聖達の門に入り六十餘州に足跡あまねく正應二年八月入寂した世に遊行上人と呼ぶ。

後漢朗詠集の柳

林鶯何處吟箏柱、墻柳誰家曝麴塵。白

◇

漸欲拂他騎馬客、未多遮得上樓人。白

◇

巫女廟花紅似粉、昭君村柳翠於眉。白

◇

誠知老去風情少、見此爭無一句詩。白

◇

大庾嶺之梅早落、誰問粉粧、匡廬山之杏未開、豈趁紅艷。

江納言

◇

雲擎紅鏡扶桑日、春嫋黃珠嫩柳風。田達音

◇

嵇宅迎晴庭月暗、陸池逐日水煙深。後中書王

◇

潭心月泛交枝挂、岸口風來混葉煩。菅三品

◇

あをやぎのいとよりかくるはるしもそみたれてはなはほころびにける

貫之

はるくれはしたりやなきのまよふいとのいろになりにけるかな

◇

あをやきのまゆにうもれるいとなれはのくるにそいろまさりける

兼輔

詩經の柳

東門之楊

東門之楊、其葉牂牂、昏以爲期、明星煌煌。

東門之楊、其葉肺肺、昏以爲期、明星晢晢。

註『婚姻時を失ふとは、定めの時を用ざるをいふ、毛享は秋冬とし、鄭玄は仲春を時とす、男子親迎すれども女子從はざるものあり、時世のかくの如くなるをそしりて此の詩を作れり』と。(國字辨)

東門之楊

東門之楊、其葉牂牂、昏以爲期、明星皙皙。

東門の楊は、既に硬くして葉は盛なり、これ既に婚期を過ぎたる女の形容である男子、禮を盡して迎へたが、女既に男あり、待てど來らず、曉の明星煌々たるに及んでしまつた。

—卷の三—

菀　柳

有菀者柳、不尙息焉、上帝甚蹈、無自暱焉、俾予靖之、後予極焉。有菀者柳、不尙愒焉。上帝其蹈、無自察焉。俾予靖之、後予邁焉。有鳥高飛、亦傳于天、彼人之心、于向其臬。曷予靖之、居以凶矜。

註　菀柳の詩は、幽王の荒くむごくして親しみなく、刑罰すれども、罪にあたらざる故、諸侯朝覲せずして作れるなり。

(國字辨)

菀然として茂つてゐる柳がこれは、道ゆく人も皆その木影に憩ふ、王盛德なれば天下の人みな往て朝せんに、王、動いて定まらず、徒らに刑罰のみ重くするので近よるものもない、鳥は天に飛ぶ、王何によつてかそれに至り得やう、予にこれを治めしめて、後は我を罪するであらう。

—卷の四—

柳の漢詩

柳　蘇東坡

今年手自栽、問我何年去、他年我復來、搖落傷人思。

望漢陽柳色寄王宰　李　白

漢陽江上柳、望客引東枝、樹々花如雪、紛々亂若絲、春風傳我意、艸木度前堤、寄謝絃歌宰、西來定未遲。

賦得長亭柳　戴叔倫

濯々長亭柳、陰連漏水流、雨搓金縷細、烟裊翠絲柔、送客添新恨、驚鶯憶舊遊、贈行多折取、那得到深秋。

譖柳　李商隱

已帶黃金縷、仍飛白玉花、長時須拂馬、密處少藏鴉、眉細從他歛、腰輕莫自斜、玳梁誰道好、偏擬映盧家。

詠柳　方　于

搖曳惹風吹、臨堤軟勝絲、態濃誰爲識、力弱自難持、學舞枝翻袖、呈妝葉展眉、如何一攀折、懷友又題詩。

折柳亭　孔平仲

楊柳已藏鴉、高亭望物華、平時常送客、此日自離家、別酒杯何滿、征途日欲斜、醉行三十里、春思滿驚花。

官　柳　陳　沂

嫋々春聲裏、陰々曉色中、縷垂金屋暗、花散玉樓空、凝露啼秦苑、因風閉楚宮、不知行輦處、幾樹近簾櫳。

孤　柳　僧德祥

孤柳在江津、年々占早春、上林何限樹、此樹獨無隣、蘸水烟條短、啼春露葉新、不知緣甚事、只贈遠行人。

柳　絮　劉禹錫

飄颺南陌起東隣、漠々濛々好度春、花苞暖隨輕舞蝶、玉樓晴拂艷妝人、索廻謝女題詩筆、點綴陶公漉酒巾、何處好風偏似雪、隋河堤上古江津。

題　柳　温定筠

楊柳千條拂面絲、綠烟金穗不勝吹、香隨靜婉歌塵起、影伴嬌嬈舞袖垂、羌笛一聲何處曲、流鶯百轉最高枝、千門九陌花如雪、飛過宮牆人不知。

詠　柳　賀知章

碧玉妝成一樹高、萬條垂下綠絲絛、不知細葉誰裁出、二月春風似剪刀。

憶江柳　白居易

曾栽楊柳江南岸、一別江南兩度春、遙憶青々江岸上、不知攀折是何人。

柳　杜　牧

數樹新開翠影齊、倚風情態被春迷、依々故國樊川恨、半掩村橋半掩溪。

柳　李商隱

柳映江潭底有情、望中頻遣客心驚、巴蜀隱々千山外、更作章臺走馬聲。

柳　李山甫

灞岸江頭臘雪消、東風偸軟入纖條、春來不忍登樓望、萬架金絲著地嬌。

楊　花　吳　融

不開櫻華不占紅、自飛晴野雪濛々、百花長恨風吹落、唯有楊花獨愛風。

—詩類函—

萬葉集の柳

第五卷

梅の花咲きたる苑の青柳は縵にすべく成りにけらずや　作者　未詳

梅の花咲きたる苑の青柳を縵にしつゝ遊び暮らさな　同

青柳梅との花を折りかざし飲みての後は散りぬともよし　土氏　百村

春柳縵に折りし梅の花誰か浮べし酒盃の上に　滿　誓

第七卷

霰降り遠江の阿渡川楊苅れどもまたも生ふとふ阿渡川楊　村方　彼方

第八卷

吾が背子か見らむ佐保路の青柳を手折りてだにも見むよしもかも　柿本　人麿

うち上る佐保の河原の青柳は今は春べとなりにけるかも　大津坂上郎女

第十卷　鳥を詠める

うち靡く春立ちぬらし吾が門の柳の末に鶯鳴きつ　同

春霞流るゝなべに青柳の枝くも　作者　未詳

柳を詠める

霜枯れし冬の柳は見る人の縵にすべく芽ばえけるかも　同

淺緑染め掛けたりと見るまでに春の楊は芽ばえけるかも　同

山の際に雪は零りつつしかすがにこの河楊は崩えにけるかも　同

山の際の雪は消ざるを激ちあふ川の柳は芽ばえにけるかも　同

朝な朝な吾が見る柳うぐひすの來居て鳴くべき森に早なれ　同

青柳の糸の細しき春風にみだれぬ間に見せむ子もがも　同

百磯城の大宮人の縵けるしだり柳は見れど飽かぬかも　同

うめの花取り持ち見れば吾が屋前の柳の眉しおもほゆるかな　同

花を詠める

我が挿し〻柳の絲を吹きみだる風にか妹が梅の散るらむ　作者　未詳

春さればしだり柳のとををにも妹か心に乘りにけるかも　柿本　人麿

第十四卷

うらもなく我が行く道に青柳の張りて立てればもの思ひ出づも　作者　未詳

戀しければ來ませ我が背子垣内柳末摘みからし我立ち待たむ　同

楊こそ伐れば生えすれ世の人の戀に死なむを如何にせよとぞ　同

を山田の池の堤にさす楊成りも成らずも汝と二人はも　同

第十九卷　柳黛を墓て京師を恩ふ歌

春の日に張れる柳を取り持ちて見れば京の大路おもほゆ　同

第二十卷

吾が門の五もと柳いつもいつも母が戀ひす業ましつゝも　矢作部眞長

柳の名木

蛇柳　紀州高野山の奥の院にある、地上五尺の周圍一丈に達し、高さ二十間、樹齡五百年といふ、昔大蛇が此地に棲み、人畜を害すること甚しかつたので、弘法大師、加持の力を以てこれを調伏した處、化して數株の柳となつたと、その狀、蜿蜒として老蛇の如くである。

船水の柳　青森縣中津輕郡藤代村船水にある、地上五尺の周圍一丈七尺に及び、高さ十五間、樹齡三百五十年といはれてゐる。

お柳樣　岐阜縣可兒郡伏見村大字伏見にある、地上五尺の周圍一丈五尺、高さ九間、齡千年と稱せられてゐる、地上五尺の處から二つに岐れ、一はその周圍一丈、他は六尺ある、古から此の柳に祈願を籠める時は、病を治するといふので、參詣者引きも切らず、お柳樣と尊稱されてゐる。

太刀折柳　愛媛縣伊豫郡、郡中村市の坪といふ處にある、地上五尺の周圍一丈餘、高さ三間で五百年の老樹であり、枝は蜿蜒として四方に伸び、約九十坪の地を蔽うてゐる、傳說に依ると、昔此の地に一木彌十郎といふものがあつて、ある武士と爭ひこの場で果しあひをし、相手を一刀のもとに斬伏せ、里人その死をあはれみ、柳の枝で塔婆を作り、その菩提を弔つた處、その塔婆から枝葉を生じて遂に今日のやうな老樹となつたといふ。

車力の柳　青森縣西津輕郡車力村下車力にある、地上五尺の周圍一丈二尺に達し、高さ八間、約百年の老樹である。

津川の柳　新潟縣東蒲原郡津川町字柳原町にある地上五尺の周圍一丈ほどで高さ四間、年傳は詳かでない。

馬山里柳　朝鮮全羅南道木浦府石津面馬山里にある、地上五尺の周圍三丈に達し高さ五間に及び、樹齡三百年と稱せらる、朝鮮に於ける第一の柳である。　—大日本老樹名鑑—

見返り柳　新吉原の入口にあつて、後朝の別れに見返るといふ心から有名になつた柳で清元の『北州』に『松の位をみかへりの柳櫻の仲の町』といふのがそれである、『江戸名所圖會』などには立派な古木に畫かれてゐるが、その江戸時代の名木は枯れ、更に栽繼いだのも大震災で燒けてしまつた。

遊行柳　下野國蘆野にあり(奥州の界)柳のもとに清潔の流れ流れたり、傍に社あり溫泉大明神と號す。

道のべの清水流るゝ柳かげしばしとてこそ立ちとまりけれ　西　行

此の歌よりの名木なり、然れば西行柳といふべかりけるを、うたひ物に柳の精靈、遊行上人に逢たると云ふ附會の說より遊行柳と云ふ

—菊岡沾凉—諸國里人談—

柳大明神

岡の屋の邊に柳大明神といふ宮あり其あたりの民家の牛やまひして頻りに死にければ彼の村長より其靈公へ御歌を願ひければ遣はされける、それより牛死ぬる事やみたりあはれみをたるゝ柳の神なればしぬるとうしとおもはざらめや

—釋慈延—隣女唔言—

柳の名歌

古今和歌集

青柳の絲よりかくる春しもぞみだれて花のほころびにける　僧正　遍昭

あさみどりいとよりかけてしら露を玉にもぬける春の柳か　讀人しらず

みわたせば柳さくらをこきまぜて都ぞ春のにしきなりける　素性　法師

後撰和歌集

青柳のいとよりはへて織るはたをいづれのやまの鶯か着る　伊　勢

青柳のいとつれなくも成ゆくかいかなる筋に思ひよらまし　藤原師尹朝臣

はるの日のかげそふ池の鏡には柳のまゆぞまづは見えける　讀人しらず

拾遺和歌集

ともすれば風のよるにぞ青柳のいとは中々みだれそめける　讀人しらず

近くてぞ色もまされる青柳の絲はよりてぞ見るべかりける　大中臣能宣

青柳のはなぞの絲をよりあはせてたえずもなくか鶯のこゑ　凡河内躬恒

花見にはむれてゆけども青柳はくる人もなし　後拾遺和歌集

あらたまの年をへつつも青柳の絲はいづれの春かたゆべき　坂上　望城

池水のみくさもとらで青柳の拂ふしづえにまかせてぞ見る　藤原　經衡

あさみどりみだれてなびく青柳の色にぞ春の風も見えける　藤原　元眞

金葉和歌集

風吹けば柳のいとの片よりになびくにつれて過ぐる春かな　院　御　製

朝まだき吹くる風にまかすればかたよりしける青柳のいと　春宮大夫公實

風吹けばなみのあやおる池水に絲ひきそふるきしのあを柳　源雅兼朝臣

詞花和歌集

佐保姫の絲そめかくる青柳を吹きなみだりそ春のやまかぜ　平　棟　盛

いかなれば氷はとくる春かぜにむすほほるらむ青柳のいと　源　秀　遠

古里のみかきの柳はるばるとたがそめかけし淺みどりぞも　源　道　濟

新古今和歌集

春雨の降りそめしより青柳の絲のみどりぞいろまさりける　凡河内躬恒

うちなびき春はきにけり青柳のかけふむ道に人のやすらふ　太宰大貳高遠

みよし野のおほかはのべの古柳かけこそ見えね春めきにけり　輔仁　親王

嵐吹く岸のやなぎのいなむしろをりしく波に任せてぞみる　崇德院御製

高潮さすむつだのよどの柳はら絲もふかくかすむはるかな　權中納言きむつね

はる風の霞ふきとくたえまよりみだれてなびく青柳のいと　殷富門院大輔

白雲のたえまになびくあをやぎの葛城やまにはる風ぞ吹く　藤原まさつね

あを柳のいとに玉ぬくしら露のしらず幾世

すみよしの春の柳のあをみどりまつなきにはのけしきなりけり　慈鎭　和尚

さらでのみ人待つ宿のしばの戸をたれこめたるはあをやぎのいと　寂蓮　法師

あたらしきしづのしば垣かきつくるたよりに立てる玉のを柳　源　仲　正

金槐和歌集

春くればなほいろまさる山城のときはの森のあをやぎのいと　鎌倉右大臣

あをやぎの絲もてぬけるしら露つゆの玉こきちらす春のやま風　同

青柳のいとよりつたふしら露つゆを玉と見るまで春雨ぞ降る　同

水たまる池のつつみのさしやなぎこの春雨に崩え出でにけり　同

あをみどりそめてかけたる青柳の絲に玉ぬくしら露のしらず幾世　同

山　家　集

山がつの片岡かけて占むる庵のさかひにたてる玉のをやなぎ　西行　法師

見渡せばさほの川原にくりかけて風によらるゝ青柳のいと　同

藤原有家朝臣

夫木和歌鈔

わがやどのまどの青やぎかぜふけばおる人なしにぬきみだる絲　中納言家持

あさみどり空になみよるいとゆふにみだれてまがふまどの青柳　前中納言定家

池みづになみは隙なくあらへともやなぎの絲はほす人もなし　素性　法師

青やぎのいとを綱手にひく舟はきしちかくこそよらまほしけれ　伊勢　大輔

春雨のふりそめしよりいつしかとかきねのやなぎいろつきにけり　讃　岐

代々をへてたえしとぞ思ふ春ごとにいとよりかくる青柳のもり　前中納言匡房

見にとくる人だにもなし我が宿のはいりのやなぎしたはらへども　和泉　式部

玉ほこの道のなはてのさしやなぎはやもりになれ立もやどらん　光俊　朝臣

あをによし奈良のみやこの玉やなぎ色にもしるく春はきにけり　前中納言定家

あさみどり先そめてけり青柳のかけふむみちはいまだ冬の野　民部卿爲家

芝居の柳

劇の中には、柳に因むものが少くなく、殊に外題丈けに青柳、若しくは柳の文字を冠してゐるものも隨分澤山あるし、場面としても大川端の柳ある處など少くないが、こゝには柳の主要なものとなつてゐるものを擧げて置くことにする。

蛇柳

これは『歌舞伎十八番』の一として古くから傳へられてゐるもので、錦繪など見ても、柳の下に斑女のやうな女性と僧形の二人が畫かれてゐるものがあるが、作の內容は一向に傳はつて居ない、併し別項、柳の名木中に引いた高野山奧の院にある蛇柳の傳說から脫化したものらしく、飯塚氏の『歌舞伎細見』には次の如く記してゐる。

豐芥子の『壽歌舞伎狂言考』によると、寶曆十三年五月江戶中村座の『百千鳥大磯流通』で、四代目團十郎が半道化の丹波助太郎といふ役で、あだし女がある爲めに、その戀女の三勝が嫉妬のあまり助太郎に憑り移つて、嫉妬の荒事、なほ團十郎の淸姬の幽魂で、高野山蛇柳の仕打ち大當りとある、淨瑠璃は大薩摩主膳太夫連中で、『夏柳烏玉川』作者は金井三笑である。

三十三間堂棟由來

これは柳に關するもので、最も有名であり人口に膾炙されてゐる、人形淨瑠璃にはよく上場され、義太夫節では主なものとなつてゐるが、大歌舞伎ではあまり上演されない。

今日の『三十三間堂棟由來』は、寶曆十年十二月大阪豐竹座で上演された『祇園女御九重錦』の改訂增補されたもので、若竹笛躬、中村阿契合作で、柳のお柳の件はその三段目である。

梗概は、白河天皇が御腦を病み給ふ原因は院の御前身たる熊野の蓮花房といふ高僧の髑髏が岩田川の水底に沈み、それが岸の柳の根のもとに埋れてゐる爲め、柳の木が風にそよぐまに〳〵御惱になるといふ神僧の御告、法皇は直ちに北面の武士橫曾根光當に院宣を賜はつて髑髏の詮議と、蓮花王院三十三間堂建立の用材切り出しを命じ給ふ、所が橫曾根の同役で、腹黑い岩淵時澄は、彼を不首尾に陷らせ、自から奉行の役を奪つて熊野へ下つた、光當は功成らぬを恥ぢて切腹する、一子平太郎は瀧本の庄司の娘お柳と契つて綠丸と呼ぶ子まで設けた、お柳は實は平太郎に助けられた柳の老木の精が化體であつた、三十三間堂の棟の用材にこの柳の老木が伐り出される事になつた、伐木丁々の響が犇々と身にこたへるお柳は儚き契りの夫と子を後に殘して消え失せた、柳の根元から髑髏も掘り出された。木遣り音頭勇ましく曳かれ行く柳の大木が途中まで來ると、どうと地に据つて動かなくなつた、流石に親子恩愛の執着、一子綠丸が音頭を取りて手をかけると易々と曳かれて行つた、此處に橫曾根平太郎は、城中次郎盛俊の盡力で、首尾よく父の功を遂げ、父の兵術を

襲いだ。

—歌舞伎細見—

此の草木悉皆成佛といふこと、柳の傳說にはいろ〳〵あり、故角々浩々の『漫遊人國記』の中にも左の一節がある。

但馬國養父郡關の宮の高柳に古柳ありて、近き岡村の酒屋の女お柳が手招きすれば此の柳搖り、三十三間堂の建立に此の柳を用材に伐る時、伐りかけて一夜を經れば、伐屑悉く飛返りて幹に合し、古樹依然たり、また伐りかくるも前に同じ、竟に且つ伐り且つ伐屑を燒きて初めて伐倒すを得、是に於て柳は人の夢の天女となりて現はれしといふ、此の傳說は淨瑠璃の出處となりし一にして相似たる老樹古木の傳說は地方に少からず。

小野道風靑柳硯

書道の名家小野道風が、靑柳に蛙の飛びつくのを見て、一念發起し、書道に精進して古今比びなき大家となつたといふ傳說を、面白く取入れたのが此の戲曲で、作者は竹田出雲吉田冠子、中邑閏助、近松半二、三好松洛等で、初めての上演は寶曆四年十月大阪竹本座であるといふ。

梗概は天下を狙ふ橘逸勢（はやなり）は養淸院の女御美奈の川に橫戀慕するなど傍若無人の振舞をつくしてゐたが、こゝに小野の篁の二子、道風賴風の二子、父の罪に座して民間に育つ中、漸く歸參が叶つたので、逸勢は道風を味方に引き入れやうと、大工獨鈷の駄六に旨を含める、道風は我家へ歸りがけに不圖道の邊の靑柳に蛙の飛びつくをじつと見て、一天萬乘の御位もかうした形勢になると危いと悟り、深く慮ふ所があつて駄六のいふまゝに逸勢の味方となつた。

道風の弟賴風は、不圖した緣から女御の妹女郎花と契る中となつたが、何時か逸勢の臣伴强宗の知る處となり、强宗は賴風を引立て道風の館に來り、女御の妹女郎花と賴風を契らせたは、二心ある證據、さなくば誓文を書けと道風の無筆をつけ込んで難題をいふ、賴風の乳母法輪尼が身を捨てゝの祈願に不思議や今まで無筆の道風の筆がすら〳〵と動く、のち、小野良實と道風、賴風、の三人が心を合せ、獨鈷の駄六も實は文屋康秀に勘當された息秋津で、主上に味方するものと本心を明し三人を助け、こゝに逸勢を亡ぼして天下太平となるといふ筋、主眼は靑柳の件で、美しい舞臺面を畫き出す。

梅柳中宵月

默阿彌の世話物中、艶つぽい一幕として有名な、『柳巷春薊色縫（さとのはるあざみのいろぬひ）』卽ち十六夜淸心の中の滑川入水の場で、淨瑠璃淸元の外題が、此の『梅柳中宵月』で、川端にはお約束の柳、遠見は鎌倉の屋敷町、『朧夜の星の影さへ二つ三つ四つか五つの鐘の音も若しや我が身の追手かと、胸に時うつ思ひにて……』と廓をぬけし十六夜の出となる。

鎌倉極樂寺所化淸心は大磯の遊女十六夜と馴染を重ねた女犯の罪で由比ヶ濱に追放され十六夜も廓をぬけて、こゝにめぐりあひ入水する『岸よりのぞく靑柳の、枝もしだれて川の面水に入りなん風情なり』のあたりが最高調となる、なほ柳で舞臺に風情を添るのは、『戾橋』、梅雨小袖の『閻魔橋』、『眞景累ヶ淵』新作物で『安土の春』などよく巧みに柳を使つてゐる。

俗曲の柳

青柳

〽されば都の花盛り、大宮人の御遊びも、蹴鞠の庭の面、よもとの木蔭枝たれて、くれに數ふる靴の音、柳櫻をこきまぜて、錦をかざる諸人の、華やかなるや小簾のひま、もれくる風の匂ひきて〽こがひの寅の牽綱も、長き思ひにならのはの、その柏木もおよびなき、戀路はよしなしや、これはおひたる柳の色のかりぎぬも、かざをりも、〽風にたゞよふあしもとの、たよ〳〵としてなよやかに、たち舞ふふりの面白や、實に夢人をうつゝにぞ見る、實に夢人を、うつゝにぞ見ん。—琴唄—

出口の柳

たてまつるよ、奈良の都の八重櫻、けふここのへにうかれきて、二度のつとめをしまばらの、出口の柳ふりわけて、戀とぎりとのよいさよ、ふたへ帶、結ぶちぎりはあだし野の、よをつゆの、うき身を誰ゆゑにさ、世わたる舟のかひもなや、しまかくれゆくいそ千鳥、しのびねになくうき泪、かほが見たさにまたここへ、きつぢのさとの朝ごみに、なたねやけしの花の色、うつりにけりないたづらに、我が身はこれのふ此のすがた、つれなきいのちながらへて、まだ此ごろやしのばれん、しのぶにつらきめせき笠、深き思ひぞせつなけれ、今はたいこもなりやみて、もらひし文の數々も、つきぬあはれを身に受けて、せめてなんぞの御恩德、報ぜんためのあひの山、あはせましたやわかさまに、わかれたまひし心根を、思ひやられていまとても、むかしわすれぬもらひなき、かたるあはれはまたの世に、きたるまじきは、あつくんくるわのまぶぐるひよ、たたりをなすな、ごきねんと散つて。

—地唄—宇治加賀掾作—

やなぎ

柳々で世を面白う、うけて暮らすが命の藥、梅にしたがひ、櫻になびく、その日〳〵の風次第、うそも誠も義理もなし、初は粋におもへども、日增に惚れてつひ愚痴になり、晝寢の床のうきおもひ、どうした日和の瓢箪か、あだ腹のたつ月ぢやへ。

—端唄—

街の柳

街のやなぎ、いとたをやかに、あれ春風が吹くわいな、我が心のやるせなさ、思ふ殿御に知らせたい。

—小唄—柳澤淇國作—

枯やなぎ

枯やなぎ、いとも昔をしのび駒、なんの二上り三下り、鳴く千鳥さへ水調子。—小唄—

柳は風の

よしあしひきの山廻り、四季の詠めもいろ〳〵に、浮き立つ空の彌生山、桃が笑へば櫻がひぞる、柳は風の應揚に、誰を待つやら小手招く、霞の帶の辛氣らし。

—常磐津「山姥」—四季山めぐり—

柳の名句

駒とめて橋に影ふむ柳かな　宗祇
風けづる柳や岸の額がみ　宗長
青柳の眉かく雉子の額かな　守武
青柳はふり分髪のかぶろ哉　德元
おのが枝を上手に差や筥柳　貞德
花房にくみませぬるや糸柳　立圃
春柳は風伯神のさかきかな　貞室
軒に糸垂るゝはすだれ柳哉　卜養
葛城の天狗たふしかふし柳　重頼
柳から眠りさそふや春の雨　惟中
むしの子や柳の髪を梳ぬらむ　西鶴
青柳にいよ〳〵眠る胡蝶哉　嵐蘭
から傘に押わけ見たる柳哉　芭蕉
こねりをもへらして植し柳哉　湖春
人ごみの中に枝垂るゝ柳哉　浪花
引き寄て放し兼ねたる柳哉　丈草
姑の氣に入る人はやなぎ哉　去來
ねぢ上手けふは柳にやらしませ　智月尼
傾城の賢なるはこの柳かな　其角
目前に杖つく鷺やなぎ影　嵐雪
煎餅や鮒のかけたる柳かけ　三千風
笠の緒に柳綰ぬる旅寢かな　惟然
合羽着て撫ても見たき柳哉　涼菟
舟借りて春見遣らむ柳かけ　北枝
それ〴〵の朧のなりや梅柳　千邦
青柳は手にも及ばし放下僧　園女
遠乘りや鞭は柳のあり次第　沾德
木兎の眠り落ちたる柳かな　琴風
青柳に念なかりけり朧月　杉風
縫あけのそろりと降る柳哉　貞佐
靜さに庭をのぞけば柳かな　希因
思ひ出に物なつかしき柳哉　才麿
青柳や鷺飛ぶ舟の横たふし　湖中
唐繪にも假名にし垂る柳哉　乙由
けふの日を柳にやりて川端に　鬼貫
五人扶持取てしだるゝ柳哉　野坡
風やんで隣に戻すやなぎ哉　不角
晴間より夕日にすべる柳哉　吏登
古柳咲くやくず家の水車　淡々
青柳や地の果もなき水の上　千代女
すかし見て星に淋しき柳哉　樗良
帆につれて走さうなる柳哉　也有
青柳や我が大君の草か木か　蕪村
梅柳初春の眼たしかなり　白雄
見盡して鏡にうつす柳かな　大江丸
狙公の猿かつぎ出す柳かな　士朗
傘かりてうとき人見る柳哉　巢兆
青柳に留守は預けむ門の鎖　成美
青柳の見えず成たる夜更哉　完來
犬の子のふまへて眠る柳哉　一茶
青柳や稻荷の額の女文字　抱一
見る程になれば雨よぶ柳哉　宇橋
曳けば來て相手にならぬ柳哉　鳳朗
犬に逃げて雞上がる柳かな　几董
牧守と共に年ふるやなぎ哉　蓼太
七草の七朝過ぎしやなぎ哉　乙二
胴を隱す牛の尾戰く柳かな　素堂
町の柳十本毎に灯をともす　子規
門前の春色すでにやなぎ哉　虛子
荷車の柳ひきづるほこり哉　鳴雪

躑躅の概説

躑躅の形態

躑躅は石南科に屬する灌木で、もとは東洋固有の植物であつたやうであるが、今日では歐米でも盛に栽培されて、それが逆輸入されたりしてゐる、冬でも葉が落ちず、春夏の候美花を開いて山野を彩ること、普く人の知る處である、高さは三四尺から八九尺位になり、葉は互生、多く披針形で細かい毛を生じ、花は漏斗狀を爲し五裂し、その一片には細かい斑點がある、色は赤、白、紫、樺といろ〳〵あり雄蕋は五本乃至十本で細長く、雌蕋は一本で、子房には多くの室をもつ、果實は蒴果で乾燥して裂け、中から翼をもつたやうな小さい種子が現はれる。

躑躅の種類

日本に產する躑躅も隨分多く、植物學上の種類さへ五六十種に上る、主なるものを列擧すると、

蝦夷つゝじ、雲仙つゝじ、土佐つゝじ、米つゝじ、山つゝじ、八鹽つゝじ、紫八鹽つゝじ、蓮華つゝじ、三つ葉つゝじ、黑船つゝじ、霧島つゝじ、赤桔梗つゝじ、琉球つゝじ、紫琉球つゝじ、梅花つゝじ、車つゝじ深山霧島、さつき、九葉さつき、もちつゝじ、唐つゝじ

其他で、庭木として植ゑられる『どうだんつゝじ』も同じ石南科である、山躑躅、『さつき』等は、關東から、東北の山地にかけて自生し、晩春から初夏にかけて、美しく彩るのは人も知る處、那須、日光、鹽原、木曾の如きは、その名所として聞えてゐる。

躑躅の字義

躑躅といふむつかしい文字は、元來獸が膝をつきかゞまる形であるが、中には蓮華つゝじや三葉つゝじの如き有毒植物があり、蓮華躑躅はこれを動物が食べると、忽ち『躑躅(てきしよく)して死す』といふので、羊躑躅の名がある、『さつき』は元來五月頃咲ので、皐月の文字を用ひてゐるが、漢名は杜鵑花といひ、又紅杜鵑と書く、『格物總論』に『杜鵑啼時始用故名焉』とある、又その色彩が、石榴に似てゐる處から、山石榴ともいふ、漢詩に現はれてゐるのは、多くこの種で、日本の古歌には岩つゝじの名があるが、これまた山躑躅をさしていふのである、蓮華躑躅の有毒植物であることは既に記した通りであるが、その爲め此の種に限つて、驚羊花、羊不食草、老虎花などの異名がある、霧島は元來九州霧島地方に多いかで此の名があるが、漢名を『映山紅』といふ、實際、山地を此の花で彩られたのは美しいものである。雲仙は花が極く小さく、直徑三四分位、極めて特色がある、黑船は唐躑躅と共に寛文八年に渡來したもので、黑船の名が此の舶載植物であることを物語つてゐる。淀川つゝじは、紫が特長であり、もちつゝじは黃色を呈す。

晉山世稿の記事

黃船躑躅や、唐躑躅は、外國から輸入したのであるが、逆に日本から躑躅を輸出したことが、『晉山世稿』といふ書に見える、その文に曰く

太明成化年中、日本より躑躅數盆を得たりその花開くに及び、單葉にして花瓣甚だ大に色は石榴に類して疊蕚あり、久しくして衰へず、我が國色、紫も啻ならざるなり、上これを嘉賞し、命じて上林園に下し外人に祕して分ち植ゑ、よく得ることなし、一は盆に栽ゑ、一は地に植ゑて以て之を試む地に植ゑたるものは凍死し、盆なるは恙なく、數年の間、枝條方に盛なりき。

と、太明成化年中は、我が後土御門天皇の御宇である。

日本に於ける流行

躑躅が日本に於て盛に流行したのは延寶から、元祿へかけてである、その九年水野元勝が著はした花壇綱目には百四十七種の品を揭げ、元祿七年伊藤伊兵衞の著はした『增補地錦抄』には三百七十一品を記載してゐる、その後德川時代も末になつて流行が衰えたが、明治時代になつてから復活し、大正から昭和へかけて益々隆盛となり、一芽幾圓といふやうな品種まで出來た、現在行はれてゐる品種は三百餘に上つてゐる。

夢窓國師の創案

躑躅がその葉四時凋まず、落ちず然も美花を開くので、庭木としては殊によく用ひられた、殊に室町時代の各園には、よく此の躑躅を或は圓く、或は角に、時に山の如く、時に孤島の如く、いろ〳〵に刈り込んだ形を見せた、これは、樹に依つて廬山や、泰山や、本朝なら寢覺の床や、竹生島といふやうな名所名跡の形を寫したもので、心なきものは、國師の業を見て心なき技として排するが、決してさうでなく、その處により境に臨んでこれを試みたものは誠に面白いので、此の方法今日も行はれてゐるが、それは唯形のみを寫すので、徒らに圓や角に刈り込むばかり、天下の名境を寫すといふやうな目的とは自から違つてしまつたのである、そして夢窓國師の此の刈込みに用ゐられてゐるは、大方此の躑躅である。

躑躅の名所

躑躅としては、何というても九州雲仙を擧げなければならない、その規模の尨大なる、花の豐富なる、然も溫泉ケ嶽といふ自然の大背景があるのであるから、一寸他に比類を見ぬ美しさがある。國立公園に指定されてゐるのも誠に當然である。

園藝的品種を多く集めたのは、群馬縣館林の躑躅園である、何れも老木で、丘は渡良瀨川に臨み風致よく、その滿開の時は、全園燃ゆるが如き壯觀を呈する、此の種のものでは日本一である。自然的に花畑を爲してゐるのは富士山麓青木ヶ原の一部で、山躑躅の群落が見られる。

此の外、日光、鹽原、那須等は何れも山躑躅を以て名があり、滿開の際は、人目を眩ずるやうな美しさとなる、群馬縣赤城山も亦名高く、此のは淡紅の山躑躅で、俚稱赤城躑躅として有名であり、風光の美しさでは、木曾山中の常盤橋や鞍馬(あんば)橋邊の斷崖の紅杜鵑を擧げなければならない。

躑躅の名木

灌木であるから名木としては稀であるが、石川縣鳳至郡西保村赤崎小坂氏邸內の大躑躅は樹齡六百年東西九間に及ぶ大樹で、前田侯も幾度か杖を曳いたといふ來歷がある。

躑躅の品種

躑躅は近年非常なる流行を極め、加へて外國産も續々輸入され、これは溫室栽培により早春既に花を見せるので非常に珍重されてゐる、いま園藝界に於て行はるゝ躑躅の品種はこれを皐月性、霧島性、琉球性、中性、外國種と分けてゐるが、その銘の主なものを擧げると、

皐月性　御幸錦、金華山、松　波、高嶺絞、御所櫻、貴公子、金の采、源氏車、御所車、博多白、酒中花、蜀紅錦、三光錦、四季籬、絞朝顏、山　姥、東明錦、谷間雪、紅牡丹、笑獅子、夕　霧、譽の錦、二重鶴、鳳　凰、月山錦、月宮殿、曙　錦、綾　錦、狂獅子、御代春、富士雪、鶴羽重、廻　鶴、梅花錦、人　丸、六歌仙、卷　絹、嵐　山、源氏籬、七福神、十六夜

霧島性　蝦夷錦、錦孔雀、醉楊妃、新青梅、筆　塚、梅　月、大和櫻、吳　服、以呂波山、漣

琉球性　大霧島、鳳凰殿、白　龍、十重車、錦の森、靜　崖、大　青　花、飛鳥川絞、大　紫、初　霜

中　性　黃蓮華、金　蓋、見染車、雲　禪、豐後錦、樺蓮華、花　車、天が下、黑　船、平牡丹

外國種　西海波、天司寶、瑞　龍、青海波、淡雪錦、大鵬錦、白牡丹、紅麒麟、源氏牡丹

等で、此の中、目下一番廣く行はれてゐる皐月性の銘花の花形色彩を記すと左の通り。

御幸錦　舊名白王殿、鳳輦、長生殿、色は青白地に本紅絞、八九瓣より十四五瓣、車咲大々輪

金華山　白地鮮紅絞、綠白半染分、光琳葩大輪

松　波　白地に紅の伊達絞、五六瓣より十二三瓣咲交り注連飾の名あり

金　采　濃紅切れ咲、十二三瓣の奇花。

絞朝顏　白地に藤色の絞り、二重、早咲きの上品。

源氏車　淡紅色に本紅絞、爪白八九瓣より十四五瓣、車咲大輪。

高嶺絞　とき色地に白を帶び、濃紅の上に絞り。

大內獅子　白地に紅絞、花裏獅子大にして大輪なり。

人　丸　柿色地に丹紅絞、白茶絞、五六瓣より十二三瓣、咲分大輪。

貴公子　底白紫覆輪桔梗咲、花容色彩共に高雅。

御所車　本紅八九瓣より十四五瓣の車咲にて大輪。

二重鶴　白地に薄紅及紅絞、二重又は獅子咲交り上花。

狂獅子　白地に本紅絞、又は赤地に白絞咲交り花裏に獅子あり。

嵐　山　とき色地に本紅吹かけ絞、大輪の上々。

酒中花　丹紅底白又はとき色、丹紅覆輪咲の交り上花。

曙　錦　曙地に紅の筋入、大輪花容上品

御所櫻　薄櫻色の大輪、花容高尙の貴品

三光錦　白紅絞り底白等開く、大輪。

山　姥　濃紅の八重花笠咲き。

綾　錦　雪白地に本紅絞、白紅の咲分、采咲及葦咲等交り、貴品。

富士の雪　本紅雪白深覆輪大花上々。

難波錦　白地に紅の立絞、吹掛。

玉獅子　とき色底縁白、花裏に獅子あり

四季籬　紅白覆輪、白の立絞二重四季咲の大輪。

谷間の飾　本紅底白簑掛は白色

鴛の羽重　とき色縁白ぼかし、紅の立絞り二重の大輪。

蝶の羽重　本紅二重三重丁字咲四季咲にて間斷なく開花す。

旭　鶴　淡紅ぼかし縁白の大輪。

四季高嶺　とき色地に紅絞り白覆輪二重の四季咲。

八咫鏡　濃紅底白又は濃紅に白大玉斑入咲交り一重上々。

東明錦　薄櫻色地の濃紅絞り大輪。

谷間の雪　丹紅底白丸葩の大輪。

博多白　青白色の大輪、高雅無比。

卷　絹　本紅菊咲花中に葩卷き狂ひ白絞入りの奇花。

千歲錦　雪白地御紫紅伊達絞大輪上々。

譽の錦　淡白地に本紅絞り蓝多く花容梅の如し。

花の司　本紅底白二重簑掛等咲交り大輪

月宮殿　雪白色光琳葩の大輪。

七福神　藤色を帶び濃とき色八重車咲。

九重錦　曙地に本紅立絞二重四季咲。

不夜城　丹紅底白二重上々。

群千鳥　薄櫻色地紅の飛入光琳葩大輪。

竹生島　とき色地に紅の大立絞二重大輪

綠　丹紅無地蓝咲花容松葉の如し。

都獅子　淡紅地紅絞裏に獅子あり大々輪

唐　錦　雪白地に濃紅絞り。

松　島　白地に紅の立絞り大輪。

紅萬重　紅色萬重菊咲大輪。

鶴の羽重　雪白二重大輪。

高　砂　藤色大輪開花後小雛寄り奇花。

鳴海錦　青白地紫絞波狀あり。

風　車　桃色切れ咲きの奇品。

櫻小町　櫻色の大輪美しき花。

群　雀　本紅中に白の小花片を附く奇品

峯の雪　淡紅地に本紅絞爪白大輪。

紫　龍　紫丁字咲の大輪。

錦　重　雪白地に本紅絞二重大輪。

關守采　本紅采咲及牡丹咲等、奇品。

名　月　本紅三四瓣より八九瓣咲分け。

緋の袴　濃紅色花裏に袴あり。

六歌仙　白地に紅絞、六七瓣。

小　町　淡紅地に本紅絞り爪白。

紅丁字　濃紅色丁字咲。

簑　火　紅紫色の大輪。

明石浦　柿色の大輪。

笑獅子　桃色の中に丁字出で色は咲分。

簑　笠　白地鮮紅絞花裏に簑あり。

都　紅　濃紅色の大輪。

龍　頭　桃色丸咲及采咲枝幹屈曲す。

神樂獅子　濃紅獅子咲大輪。

御代の春　曙色大輪の上々　—以下略—

躑躅の畫

躑躅の繪畫に現はれたものは、多いやうに思はれてゐて、扱て割合に少いものである、山水畫の中に、點出されたものは、間々見受けるが、躑躅丈け畫いた作などは、容易に見當らないのである、左に、二三を擧げて置く。

光琳筆躑躅圖　園　伊能男藏

躑躅の繪といへば、いつも此の作が擧げられるのである、雄勁な此畫風の筆致に、典雅な大和繪風の賦彩筆觸を加味させて、光琳獨特の味を出してゐる、此の作の土坡の墨色の面白さ、その紅白の躑躅の如何にも瀟洒な筆致、更に小岩石を挾んでくの字なりに流れてゐる水、よく整つてゐて全く一點一劃の加除を許さない、光琳の筆の中でも、誠に貴重な小品といはねばならない。

光琳筆檜に躑躅　松浦伯爵舊藏

この作になると前と、前とは變つて、ぐつと裝飾的になつてゐる、檜は光琳獨特の筆致で、他人の追從を許さぬし、そこに添へられた躑躅の形が如何にも面白い、溜め墨の土坡の上に一輪笑つてゐる菫の花の可憐さ、柔かい描線と絢爛な色彩をこれほどまでに縱橫に驅馳するもの、他に類例を見ないと思ふ、大さは幅一尺五寸八分、縱三尺七寸四分、廣行の添狀がある。

應擧筆躑躅と熊　尾州德川家舊藏

これは尾州家の舊藏で、のち藤田男爵家に入り、同家から又他へ移つた、中が黃初平で左が犬に南天、右が此の熊に躑躅といふ三幅對で、躑躅はほんの添景に過ぎないのであるが、如何によく此の樹を寫生してゐるかが知られやう、ほんとうに躑躅の形態をよく見てゐる。

乾山筆躑躅小屏風

山中定次郎氏が昭和八年日本美術協會に陳列したもので、六曲の小屏風の天地を金地の霞として、その間を高低起伏する丘とし、これに紅白一面の躑躅を以てしてゐる、紅白の花の位置が面白いし、何處となく大膽な構圖が乾山らしい、花の間に一寸土坡を見せてゐるのが小細工に見えるが、それは白壁の微瑕敢へて咎め立てするほどの事もあるまい、兎に角、躑躅の繪としてこんなのは珍らしい。

松榮筆躑躅雉子圖　早川家舊藏

三幅對の一つである、雉子の上に躑躅が見えてゐるのであるが、これは隨分寫實ばなれのした筆で、躑躅と見れば見られぬでもないが、あまり感心した作とは思へなかつた、唯珍らしいといふ丈けである。

草　原　長山はく子筆

最近のものでは、長山女史が第十三回の帝展に特選を得た此の作が、躑躅を畫いたもので著しいものである、紅白の躑躅の滿開に二羽の白文鳥を配してゐる、畫題は草原とあるが、白文鳥を配した點から見ても草原ではない庭の一隅である、此の作の外、躑躅を畫いたものでは、第八回の帝展に北上聖牛氏の『惜春』がある、畫面の中心は赤松と山鳥であるが、こゝでは山躑躅が非常に重要な役割を占めてゐる。

躑躅の詩

酬鄭毗躑躅詠　　孟　郊

不似人手致、豈關地勢偏、孤光裊餘翠、獨影舞多妍、迸火燒閒地、紅星墮青天、忽驚物表物、嘉客爲留連。

杜鵑花　　方　干

未問移栽日、先愁落地時、疎中從間葉、密處莫燒枝、郡客教誰採、胡蜂見自知、周廻兩三步、常有醉鄕期。

白杜鵑花　　陳經言

蜀魄何因冷不飛、空山一片影霏微、那須帶血依芳樹、自可梳翎弄雪衣、細雨春波愁裏浦、素女輕風明月泣湘妃、江南寒食催花候、腸斷無聲莫喚歸。

寒食日題杜鵑花　　曹　松

一朵又一朵、併開寒食時、誰家不禁火、總在此花枝。

山石榴花　　施　肩　吾

深色燕脂碎剪紅、巧能攢合是天公、莫言無物堪相比、妖艷西施春驛中。

暖風深院賣花天、爭買繁花鬢髻邊、揀得一枝紅躑躅、隔簾拋與沈郎錢。

映山紅　　失　名

朶辨差堪比杜鵑、但憐色淺不爭妍、遙看喜動期占驗、紅遍春山兆有年。

杜鵑花　　張　獻　翼

花々葉々正含芳、麗景朝々夜々長、何事江南春去盡、子規聲裡駐年光。

同　　冠　準

杜鵑啼處血、成花辛棄疾、詞無數猩々、血染赭羅巾。

芥川無咎會約同賞美人山石榴、歸而無咎歿江戸余獨往覩　　藤井竹外

萬朶山榴爛熳芳、佳期底事也茫々、美人山上背花立、却望美人天一方。

躑躅　　河野鐵兜

少樹大繁華、青山雲亦熱、一紅分早遲、春猩深淺血。

◇　　白　居　易

間折兩枝持在手、不似花叢似火推。

同

太儀前日煖房來、囑向昭陽乞藥栽、勅賜一窠紅躑躅、謝恩未了奏花開。

杜鵑花　　胡　天　游

千房萬葉一時新、嫩紫殷紅鮮麵塵、淚痕裏損胭脂暎、剪刀裁破紅絹巾。

躑躅の歌

萬葉集

水傳ふ磯の浦回の石躑躅もく咲く道をまた
見なむかも　草壁皇子の舍人

山越えて遠津の濱の石躑躅わが來むまでに
含みてあり待て　作者未詳

細領巾の鷺坂山の白つつじわれに染はね妹
に示さむ　柿本人麻呂

をみなへし佐紀野に生ふる白躑躅知らぬこ
と以ち言はれし吾が背　作者未詳

古今和歌集

思ひ出づるときはの山の岩つゝじ言はねば
こそあれ戀しきものを　讀人しらず

後拾遺和歌集

岩つつじをりもてぞ見るせこが着し紅ぞめ
の色に似たれば　和泉式部

わぎもこが紅ぞめの色と見てなつさはれぬ
る岩つゝじかな　同

金葉和歌集

いり日さすゆふ紅の色はえて山した照らす
岩つゝじかな　攝政左大臣家三河

夫木和歌鈔

浪かくるみほの浦邊のしらつつじいづれを
花と見てか手折らん　光俊朝臣

くらふ山木のしたかけの岩つゝじ唯これの
みやひかりなるらん　崇德院御製

あすか川往來のひとやかさすらん岡べのつ
つじいまさかりなり　中勢みこ鎌倉

あふことはとをつのはまの岩つゝじいはゝ
やしらんおもふ心を　後鳥羽院御製

わするなよとをつの濱の岩つゝじ山をこえ
てもまたかへりみん　式子內親王

岩つゝじいはでやそむる忍ぶ山こゝろのお
くにいろをたづねて　從二位家隆

くらとりのさゝきか山の岩つつじいはねど
春のいろは見えけり　藤原定家

くれなゐのきぬ笠岡のいはつつじ日影さし
てそいろまさりける　後鳥羽院御製

やましろのいはたの岡の岩つつじいはまく
ほしき花のいろかな　前中納言匡房

ふりはへて折りに來たれはこまにしきくれ
なゐふかき岡つゝじかな　相模

山家集

はひつたひ折らで躑躅を手にぞとるさかし
き山のとり所には　西行法師

つゝじ咲く山の岩かけ夕ばえて小ぐらはよ
その名のみなりけり　同

柿園詠草

ふし岩のつつじが本のいさら水夢を流して
胡蝶とぶなり　加納諸平

もえ松に躑躅折りたく賤の女が子ゆゑにい
そぐ夕暮の山　同

ふふみつるまがきのつゝじ散りにけりあか
らさまにも宿りしものを　同

◇

つつじ咲く片山岨のゆふばえに妻こひすら
しきぎすなくなり　井上文雄

片岡の道の小寺のつつじ垣ほろほろ散りて
人かけもなし　同

水あせし野澤のきしの岩つつじ小松まじり
の花さきにけり　伊東裕命

躑躅の名句

藤つつじ花に岩ふむ山路哉　宗祇

藤色にあけ奪はれな岩躑躅　宗長

花よりも團子と己が岩躑躅　宗鑑

紫の色や小豆のもちつつじ　貞德

團子よりましたる花か餅躑躅　立圃

鐵色に移さば段のつつじ哉　重頼

山つつじ海に見とや夕日影　智月尼

底白に紅粉はき殘す躑躅哉　秋色女

岩に腰わが頼光の躑躅かな　蕪村

つつじ野やあらぬ處に麥畑　同

大原や躑躅の中に藏たてゝ　同

躑躅活けて其陰に干鱈裂く女　芭蕉

香具山に赤い物干す躑躅哉　也有

花稀に老て木高き躑躅かな　太祇

白雲の根を尋ねけり岩躑躅　召波

苔には鍬を見せたる躑躅哉　同

石地藏筒一杯のつゝじかな　嘯山

雪踏みてすべる山路の躑躅哉　几董

旦夕の端居はじむる躑躅哉　其角

小鳥居は葉守の神か躑躅山　同

水呑を烏帽子に着む岩躑躅　同

山躑躅招くやうなり角櫓　嵐雪

旅籠屋の夕ぐれなるに躑躅哉　蓼太

人の代に成て見上る躑躅哉　同

山城や紫つゝじかぎりなき　白雄

今更に蔦あさましや岩躑躅　同

片岨の躑躅とぎるゝ巖かな　同

遖に咲くや端山の花つつじ　闌更

夕山を根こぎて戻る躑躅哉　同

流れ汲隣もひたすつつじ哉　巢兆

山姫や溫泉壺に活し花躑躅　同

さきの世は朱雀の鬼か躑躅賣　乙二

なまなかに躑躅植てぞ山心　同

關屋にも佛壇ありて躑躅哉　雁岩

垣なくて妹が住居や白躑躅　同

合羽干す日陰に白き躑躅哉　不流

蒟蒻に躑躅の名あれ太山寺　子規

紫の夕山つつじ家もなし　同

旅人の躑躅引ぬく山路かな　子規

大磯や庭砂にして松つつじ　同

躑躅山茶店出したる村の者　碧梧桐

黑谷の裏門はいるつつじ哉　同

明樽の躑躅淋しや二百文　鳴雪

躑躅活けて女經讀む山の中　同

藍に染む絲の乾きや山躑躅　青々

花多き夜店の躑躅灯りけり　同

大久保や躑躅の道を訪れ顔　盧子

古墳や誰さしすてし枯躑躅　同

這檜葉に蜥蜴の移る躑躅哉　六花

雲坂の下懸崖やむらつつじ　同

峽雲の夏趣に染ける躑躅哉　同

折とれば躑躅の枝の蟻多し　繞石

酒を呑む童子が夜の躑躅哉　秋皎

お預に犬の行儀や庭つつじ　柑子

置く笈に山蟻上がる躑躅哉　雪人

比叡山へ出る禿山の躑躅哉　灯家

方丈の障子を染むる躑躅哉　都穂

きりしまや葉一つなき直盛　風生

用水の流れて早き躑躅かな　水竹居

人立つや水の上なる花つつじ　素十

藝術資料 第一期植物篇 第五册要目

◇竹

口繪

竹林幽隱圖（蕪村）
墨竹圖（蘇東坡）
水墨竹石圖（檀芝瑞）
墨竹圖（文與可）
竹林山名圖（明畫）
竹林猛虎襖繪（山樂）
竹と錦雞圖（雪村）
竹襖繪
倭漢朗詠集（光悦）
浣濯便（大雅堂十便の中）
竹林屏風（應擧）
墨竹圖（華山）
竹徑步月（竹田）
筍圖（吳春）
疊泉蜜竹圖（梅逸）
竹林七妍圖（春章）
庄野（廣重五十三次の中）
竹（寫眞）
竹文黒粲瓶子（屏繪）

本文

竹の概說
國史に現はれた竹
竹の語源と異名
竹の緣語
竹十題
竹林七賢 竹溪六逸
竹林七妍 竹豹龍
竹植日 竹生島
孟宗と筍 此君
良寛と筍 竹林彈琴
芥子園畫傳の竹譜
竹と畫題
竹取物語
枕草子の吳竹
竹の品種
竹の名畫
竹の漢詩
竹雪（謠曲）
竹の和歌
竹の名句

編輯後記

◇『藝術資料』も漸く事業が緒に就いて來ました、偏に會員諸彦の御聲援による處感謝に堪へません。併し採算のとれますまではまだ頗る前途遼遠なので、懸命にやつてゐます、どうか同好御勸誘のほど切に懇願いたします。

◇新に入會せらるゝ方々に對し、資料はある部數までは、第一册から鄭重に保存してありますから、御申越しのあり次第直ちに取揃へ御送り致します。

◇本册の編輯にあたりましては、畏友外狩素心庵氏から一方ならぬ御贊助と御便宜を與へられ爲めに少からず編輯が捗りました、こゝに厚く御禮申上げます。

◇又第三册の內容につき、日本美術院同人長野草風氏から編輯上に對し極めて適切なる御注意を頂きました、今後の編輯上非常なる參考となりました御禮を申上げます。

◇それから日本南畫院の岸浪百艸居氏は十數名の有力な會員を紹介せられ、花道家平光波氏もまた數名の會員を御紹介下さいました、大阪の青木大乘氏は大阪方面の會員を多數御勸誘下さいました、衷心御禮申上げます、なほ皆樣の切なる御勸誘を御願する次第であります。（編者）

◇會費お拂込みに對していろ〳〵と御尋ねがあります、御便宜な方法でお送り願ひたいのですが振替でお送り願へれば、一番幸であります、或は集金郵便に托す向もあると思ひますが、これには豫め御手紙を差上げて置きますが何卒御留守でもおわかりになるやう御願申上ます。（會計）

藝術資料 第一期 第四册（毎月一回二十日發行）

定價 金壹圓貳拾錢 郵稅金六錢（會員外及分賣）

會費	
三ヶ月	金參圓
六ヶ月	金六圓
一ヶ年	金拾貳圓
郵稅共	

會員規定

三ヶ月以上御拂込の方を會員と致します。御申込は必ず前金に願ひます。振替口座東京四〇九四〇番か大阪二五八番芸艸堂宛何れか御利用のこと。爲替は受取局を無指定として、切手代用は必ず一割增の事。既納會費は拂戻の請求に應ぜず。

昭和十一年六月十五日印刷
昭和十一年六月二十日發行

編輯者 東京市赤坂區青山南町一ノ三六 金井紫雲
發行者 京都市中京區寺町二條南入 合名會社 芸艸堂出版部
印刷者 京都市下京區北小路新町西入 須磨勘兵衞
印刷所 京都市下京區西洞院七條南入 內外出版印刷株式會社

發行所 京都市中京區寺町二條南（電話上二九〇（上）振替大阪二五八番）
東京市本鄉區湯島一ノ一（電話下谷三六〇〇番 振替東京四〇九四〇番）
合名會社 芸艸堂

出版界

紫雲

本藝術資料が月刊なので、新刊書を寄贈され紹介を求めらるゝ向が多いので本欄を設けました御利用下さい、御寄贈は東京市赤坂區青山南町一ノ三六金井紫雲宛の事、なほ本欄で紹介の出版は總て芸艸堂で取次ぎます。

花詩集 河原崎晃洞著

第五巻の水の巻と、第六巻の雲霞の巻が出た、何れも著者が得意の筆を圖案に揮つて、水には大浪小波、飛沫、飛泉、露といふやうな題材を自由自在にこなす、古典的のものもあればモダンな試みのものもあり、雲霞の巻も同じく在來の靈芝雲や源氏雲、槍霞、洲濱霞などいろ〳〵短冊形の中に收め、一輯六十圖づゝ皆精緻極まる木版刷、とし、圖案家には此上ないよい手引であり、木版藝術としても上乘な出來榮である。（各巻七圓五拾錢）送料參拾參錢

時代裂名品集 山中定次郎氏藏

山中定次郎翁が多年苦心蒐集した時代名物裂の名品一百種を選み、これを精緻鮮麗なる三色版とし一々疊紙に入れて鑑賞の便を圖つたもの、時代は古きは室町時代より桃山時代江戸初期より中期に及び、更に明治を二點、支那に於ては清朝を一點加へてゐる、その室町時代のものとしては辻ヶ花摺箔小袖裂、麻唐花繡文様衣裳裂、同時代末葉の平絹地雲蓮花文様帷子の如き、文様意匠にも色彩にも時代の匂ひが深く潜んでゐて一種譬へやうもない感興に浸らされる、殊に室町末葉の平絹地雲蓮の如きは、その意匠の高踏的にして詩趣の深さ素晴しい魅力をもつものである、文様の新味を帶びてゐるものには綸子地に薊と鶴を配した小袖裂、桃山時代の岩に芦舟模様の衣服裂の如き、一は色彩に、一は繡の技巧に三嘆措く能はざらしむるものがあり原色版の印刷は何れも完全してゐるが中にも明治の白平絹地描繪竹菊南天模様の小袖裂、江戸初期の銀摺箔蒲公英繡の能衣裳の如き出色の出來榮である、衣裳に現はれた文様の研究の上にも染と繡の微妙な技巧を探究する上にも極めて津々たる興趣を覺える、かくて全百點、高雅なる桐箱に收め、正木直彦氏が題字を揮毫してゐるなど蓋し近頃出版界に於ける大出版として永く殘るべきもの、風俗史上にも貴重なる文獻といふべきであらう。（定價七拾圓）送料壹圓

凰白歌舞伎繪 三宅凰白著

早苗會の耆宿にして京都畫壇唯一の劇通たる筆者がその劇畫を芸艸堂得意の木版藝術により逐次刊行せんとするもので、今回第一輯を出した表紙は朱線を加へた白描の『暫』、扉は黛緒刷白描の『操り三番叟』中に色刷の『操り三番』童形の『車曳』に袋の白描時平公、淡彩の『だんまり』に大百柱巻きの白描、御所人形の『童形三番叟』淡彩の人形淨瑠璃二十四孝の『狐火』と五點を收めた何れも手際の鮮かな木版手刷で、密畫にしてしまはぬ處に味があり、殊に『だんまり』などは作者の最も得意とする處らしいが出來榮は童形三番叟を隨一とする、大さは菊判四倍大で、美しい帙入となし伊原青々園博士が序文を書いてゐる從來の劇畫とは違つた筆致本位としてゐる處に此の特長があり、木版藝術としても亦立派に一つの地位を獲得してゐる（定價七圓特價六圓）送料參拾參錢

古畫禽獸抄（第二巻）

本篇は水禽魚貝篇として雁、鴨、翡翠、鵜、千鳥、鱠、鯉、川魚、鮒蟹、蝦、龜、群貝等を收めた、よく部分部分の擴大圖を蒐めてゐる事で畫家などには此上ない好參考となるが鵜の如きは、まだ多くの名作がある筈、僅か一圖とは少しく物足らず魚類の如きも他の種類に比して少しく貧弱であるが、これは巻を逐うに從つて補足せらるゝのであらう慾には簡單なものでも解說のほしいことである（定價參圓）送料貳拾壹錢

日展集（第二輯）

過般上野の美術館に開催せられた日本畫會の全出品を一頁數葉づゝコロタイプ版として網羅し二十五頁に收め別に會長審査員等の肖像を附し、該展の出品を一目に見らるゝやう編輯した、今回は出品の總てを同じ大さに縮寫したので、その間多少粗密の生じたのは止むを得ないが、西澤笛畝氏の裝幀の美しく同展の圖錄として永く記念となすに足りやう（定價壹圓貳拾錢）送料六錢

桐華會第一回展覽會圖錄

深水氏の「川風」、光瑤氏の「草花」印象氏の「鹿」、神泉氏の「竹」、竹喬氏の「粟津晴嵐」、桂華氏の「庭の池」岳陵氏の「萠芽」、大三郎氏の初夏、荻邨氏の「嵐山」、橋村氏の「山居琴士」、蓬春氏の「紅白牡丹」、華揚氏の「新樹」、一洋氏の「小春」、平八郎氏の「罌粟」、希望氏の「松間帆影」、晃甫氏の「朝がほ」等をコロタイプ版として收めた、東西の人氣作家のみを集めた處に主催者としての誇を見るべく、總じて出來榮に甲乙のないのがよく、體裁も整つてゐて感じがよい（定價壹圓五拾錢）送料八錢

山中定次郎氏藏

時代屏風名画集

古土佐の名匠、狩野諸家の巨擘の筆に係かる所謂時代屏風は宗達、琳派の壯重なる裝飾藝術と相俟つてその豪華絢爛極りなきものであり、本邦近世畫壇の空前の大發展を示したものと云ふべく、世界各國人の凝視の的となるは既に周知の事實である。特に繪畫に於ける至妙の彩毫は各時代の屏風によつて初めて窺ひ得るとなすに至つてはこれの價値はいやが上に倍加する。

かゝる時代屏風を蒐集一堂に納め鑑賞し得るのは眞に此の機を逸して他に求むること能はず、殊に今回の如くいづれも未發表の珍品名作を蒐集せられたことは、大阪山中商會によつてこそ企て得るものである。玆に於て今回の時代屏風大展覽會を機とし商會が多年苦心慘憺し、全國的に蒐集して優品幾百千點を得、その中より商會主の格別なる好意により藝術家、鑑賞家の資料として愛好家多年の待望を滿すべく、五十點百圖を選んで公刊した次第である。

製版技術に至りては時代屏風特異の藝術に留意し、全圖を高級玻璃版に附し構圖を鮮明にし更に全圖或は細部を精巧なる原色版印刷に附して以て、藝術家愛好家諸彥の座右寶として研究に鑑賞に、最も便宜なる方法をとつて發表とした。希くは必ずや一本を備へられん事を。

豫約募集

圖版
精巧原色版七度刷　五十葉
高級玻璃版印刷　五十葉

用紙
特アート及上質紙使用

寸法
竪一尺二寸五分　横九寸三分

刊行
毎輯原色版十葉　玻璃版十葉タト入
隔月發行全五輯壹百葉にて第一期完了

價格
毎輯　定價　金拾圓
繼續會員　特價　金九圓
地方送料　四十五錢
一時拂會員　特價　金四拾五圓
一時拂會員には最終に帙筥贈呈す

發行所　合名會社　芸艸堂
東京市本郷區湯島一
電話下谷　三六〇〇番
振替東京四〇九四〇番
南條二町寺市都京
電話上二九〇番
振替大阪二五八番

百人一首圖考　小倉のまき

全五冊
（第三卷迄刊行）

◆歌趣畫面に溢る王朝模樣の精華◆

佐々木信綱先生序文
猪熊淺麿先生序文
尾上八郎先生題歌
飯田始晃先生著

裝幀　絹布別織表紙畫帖仕立
用紙　別漉越前奉書紙使用
內容　每冊二十圖解說を附す
印刷　精巧手摺木版極彩色數十度刷
寸法　竪一尺一寸一分横七寸七分
特價　一冊金拾八圓
定價金貳拾圓
送料　一冊金四拾五錢
鮮滿臺樺　金七拾六錢
第四冊は九月下旬發行

作者のことば

自分の意志や技量情想を直接世間へ認識させるのには二つの道があります、一つは自分一人の手で構圖色調手法の工程を了へ工藝品として發表し、直ちに需要に應ずる方法と、又一つは作品そのものを木版原色版などの印刷技術にうつし、染織工藝の參考書として弘く世間へその價値を問ふ方法とであります。

さて何をやつてよいか見當がつきかねてゐたのです、ところが製作するものゝ關係や自分の趣味から萬葉や源氏を取材としたものを描くとき、または桃山や德川中期のものを素材とするとき、その時代その人物になりきつて色々の參考書を視たり讀んだりして居るうちに、自分は何を見つめて居たかといふことが分つてきたのです。

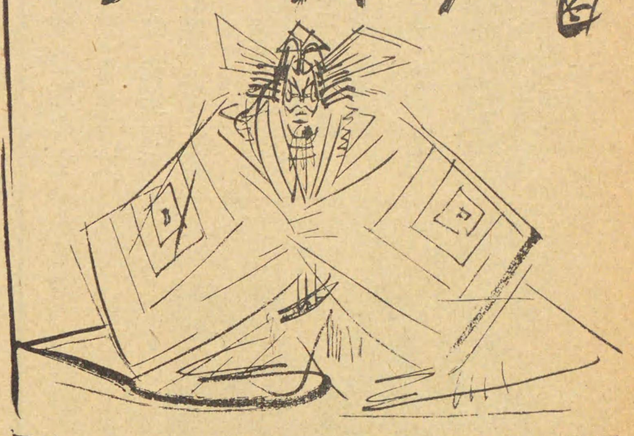
爾來數年有職に精通して居られる方や時代考證家の諸先生から教示を受け、また萬葉古今その他の歌集や物語などを讀んで未知を啓き、ある時は繪卷や納經に三嘆して只管耳目をきたへてゐましたが、一昨年偶々佐々木信綱博士の百人一首講義を再讀に及んで一つの想案がついたのです。

小倉百人一首に關する出版は多々ありますが、圖案化されて世間に出たるものはきはめて稀であることに氣づいたので、如何なる犧牲を拂つても完成したいと決心をし研究を續けてゐた折柄、芸艸堂主の囑望切なるものがありましたので、これを染織工藝の參考ともまたは昭和聖代の好尚を後世に示すよすがの一つとして木版印刷に附し弘く御淸鑑を仰ぐ事となつたのであります。

發行所　合名會社　芸艸堂
東京市本郷區湯島一
電話下谷　三六〇〇番
振替東京四〇九四〇番
南條二町寺市都京
電話上二九〇番
振替大阪二五八番

◇三宅凰白畫伯筆　伊原青々園博士序◇

歌舞伎繪



——體容と頒布規定——

◇奉書紙純木版彩色刷
◇錦繪判臺紙附
◇歌舞伎好みタト入
◇全三十葉發行
◇一輯五葉宛六輯完結
◇每輯定價金七圓
◇最終迄繼續會員に限り
◇每輯特價金六圓
送料三十六錢

第一輯目次

一、操三番叟（長唄）
一、三番叟（童形）
一、だんまり（大薩摩）
一、菅原傳授手習鑑（人形）
—車曳—
一、本朝二十四孝（淨瑠璃）
—狐火—

本圖木版彩色刷の外各葉淡彩刷を添ゆ（各輯全十圖）

演劇の藝は謂はゆる刹那に生じて刹那に消え、その跡方を留めない。幸ひに芝居繪と稱する版畫があるので、百年前の面影も眼前に見ることが出來る。然るに寫眞術が行はれるやうになつて、版畫は殆どそれに征服されてしまつた。それは寫眞が版畫よりも輕便に迅速に出來ることゝ、版畫よりも形や線の眞實を寫すことゝ、以上二つの理由からであるが、しかし舞臺の氣分とか、俳優の心持とか、色彩の配合とか、そういふ心理的のものを表現することは到底寫眞に求められない。卽ち版畫でなくては成らぬ。

だから三宅凰白君が芝居繪に專らその彩筆を揮つて居るは、大いに意義のある事だと思ふ。それも昔の芝居繪は江戸が本場であり、またそこの浮世繪派の獨占事業であつたゝめ、一定の型に囚はれる憾があつた。凰白君が京都の畫家であり、かつ浮世繪以外の人であるだけ、その芝居繪は在來の型を脫し、到るところ新意が溢れて居る。これによつて今の人も數百年後の人も、日本の演劇の妙味を滿喫することが出來る。

伊原青々園

發行所　合名會社　芸艸堂
京都市寺町二條南　電話上二九〇番　振替大阪二五八番
東京市本郷區湯島一　電話下谷三六〇〇番　振替東京四〇四〇番

福田翠光畫伯筆

翠光花鳥

◇氣韻生動の新花鳥版畫五十餘幀上梓
◇畫伯得意の花卉鳥蟲の姿色千容萬態

豫約募集

西山翠嶂畫伯題字
川村多實二博士序文
堂本印象畫伯讃文
金井紫雲先生解說

福田翠光畫伯は我が京都畫壇の俊秀、花鳥畫を得意として造詣極めて深く、その畫く處の花卉翎毛は、よくその眞を捉へ、精を盡し、然も詩趣橫溢、一作出づる每に好評嘖々たり、今回多年の蘊蓄を傾注して、新に花鳥版畫の刊行を試む、蓋し畫伯が會心の作を、我が邦獨特の木版藝術に托して刊行せんとするなり、上梓の各輯何れも筆致高雅にして淸新、描く處の動植物、皆生動して誤りなく、木版の技、また優秀にして原畫の趣きを寫し間然する處なし。美術工藝家の參考資料としては勿論、海外への我邦花鳥版畫の趣味普及に、家庭においては壁間の裝飾畫として絕好のもの、敢てこれを江湖に推奬する所以なり。

◇內容見本御申込次第御送り致します◇

◇頒布略規

竪一尺三寸
橫九寸
越前寒別漉奉書
最高純木版印刷
第一期五十幀刊行
每月一輯三葉宛發行
十七輯にて完了（最終二葉）
一輯定價金六圓
甲　每月繼續會員
特價金五圓
送料三十三錢
乙　一時拂會員
特價金八拾五圓
送料負擔

特典
甲　會員へは最終配本二葉と共に五十幀入帙贈呈
乙　會員へは右五十幀入帙贈呈の外筆者好み掛額を添ゆ

申込所　合名會社　芸艸堂
京都市寺町二條南　電話上二九〇番　振替大阪二五八番
東京市本郷區湯島一　電話下谷三六〇〇番　振替東京四〇四〇番

一鳥一獸姿態美の眞趣把握

岡本東洋撮著

鳥獸百種

京大理科教授 川村多實二博士校閲
京都動物園 星野敏謙氏解説
◇福田平八郎畫伯
◇山口蓬春畫伯序文

新菊倍判（大色紙形洋裝） 八切コロタイプ版壹百圖 特價 金五圓 送料 四拾五錢

曩に『花鳥寫眞集』續きて『花鳥風月』を出して、印畫藝術の上に一新紀元を劃し、嘖々たる好評を博した岡本東洋氏は、更に捲土重來の勢を以て、新に『鳥獸百種』を出すに到つた、その精力眞に驚くべく、その技や誠に三歎に値する、その鳥獸の姿態をレンズに收むるに當りては、極めて周到なる用意のもとに、その透徹せる審美眼を以てしたのであるから、何れもよく動物の生命を摑み、眞趣を寫して個々躍動し、然も詩趣津々として畫面に溢るゝを見る、尙解說は簡潔その要を盡されてをり鳥獸飼育の體驗者にして始めて爲し得るもので、加ふるに斯界の權威川村博士の嚴密なる校閲を經しもの、寫眞と解說と相俟ち畫家は以て制作上の範となすべく詩人は以て詞藻の泉となすを得、各學校にありては教材資料として將又絕大なるものである。

◇内容見本御申込次第御送り致します◇

京都市寺町二條南
電話上二九〇番
振替大阪二五八番

發行所 合名會社 芸艸堂

東京市本郷區湯島一
電話下谷三六〇〇番
振替東京四〇九四〇番

◇古筆名蹟の詩歌畫集成る◇

藤原行成卿書 光悅雲母模樣
倭漢朗詠抄
公任卿の倭漢朗詠集より三十三首を抄出書は行成卿の名筆を其儘地紙は詩題歌材の光悅模樣を織込み之を雲母刷とし嵯峨本風の優雅本
木版刷 定價 金參圓
解說附 送料 貳拾壹錢
全二帖

藤原行成卿書 冷泉爲恭畫
行成卿六歌仙
行成卿筆六歌仙懷紙に爲恭が歌意の繪を配せるもの、流麗暢達の書典雅を極むる大和繪風描線の對照將に好事家垂涎の名蹟たり。
木版刷 定價金壹圓五拾錢
全一帖 送料 貳拾壹錢

寂蓮法師書 大口鯛二序
寂蓮眞蹟詞華集
千載新古今の時代にありて上代文字を傳へ、恬淡高雅一異彩を放つ寂蓮の眞蹟を寫せしもの、世に右衞門切と稱す八代集の中の絕品。
玻璃版 定價 金五圓
全一卷 送料 參拾參錢

出雲寺敬通序 神坂雪佳畫
うた繪
上代歌林の明星貫之躬恒伊勢等の名歌二十五首を選み世に今光琳の名ある雪佳畫伯が其歌意を獨自の壇場たる畫筆に表現されたるもの
木版刷 定價 金六圓
全一帖 送料 參拾參錢

本阿彌光悅書 福田翠光畫
三十六歌仙集
書道の聖といはる光悅が得意の假名文字を驅馳せし三十六歌仙に京都畫壇の俊秀翠光畫伯が歌意を彩筆に表現したる出版界の名玉
木版刷 近刊
全三帖

續刊◇萬葉調◇古今和歌抄◇三十六人集抄

京都市寺町二條南
電話上二九〇番
振替大阪二五八番

發行所 合名會社 芸艸堂

東京市本郷區湯島一
電話下谷三六〇〇番
振替東京四〇九四〇番

岡本東洋撮著

東洋花鳥寫眞集

—全五十輯一千葉完結—

花鳥を撮影する技術に就いて、獨特の味を有つてゐる岡本東洋氏が、特に日本畫家の參考とする爲めに動物、植物の藝術的撮影を試み、これを『靜』と『動』の二部に分ち逐次刊行を企てたのが此の東洋花鳥寫眞集である、その收むるところ、氏の得意のものばかりであるから、寫眞そのものが既に立派な藝術品となつてゐることはいふまでもない。『靜』は植物やその他の自然現象の一部を收め『動』は主として動物の姿態を寫してゐる。その丹頂の部を見ても、先つ九皐に鳴く氣高い姿をはじめ、孵化後二日目の巢籠り、歩む姿、巢籠り三態といふ風に技術を進めて行き更に畫家の寫生の勞を助けるために雄鶴の首、羽擴げ立ち止る脚といふ樣に部分の撮影まで試み、よく丹頂そのもの、眞を摑んでゐる。一葉一葉既に繪畫となつて現はされてゐる。

花卉翎毛其眞を捉へ

詩趣津々畫面に溢る

（動之卷目次）

一 丹頂鶴　雪
二 鴛鴦　水
三 虎　の
四 鯉　花
五 鹿　春
六 鷺　の
七 鵜　寒
八 鶏　の
九 鴨　花
一〇 狗　水邊の花
一一 馬と牛　五月の花
一二 孔雀と七面鳥　夏の花
一三 小鳥　八月の郷
一四 猫と猿　水の花
一五 猫と牡丹　十月の花
一六 山羊と栗鼠　秋の花
一七 鳩　若葉の頃
一八 家鴨と鷺鳥　池畔
一九 白鳥・黒鳥　海
二〇 鷺と鳶　山
二一 兎・狸・狐　湖
二二 金鶏銀鶏　庭
二三 小鳥（二）　梅
二四 丹頂鶴（二）　竹
二五 雄子・鶏　松の雪

（靜之卷目次）

一 翡翠　鵲
二 鸚鵡　鶯
三 杜鵑　佛法僧
四 白鷺　鷺
五 伽藍鳥　鵜
六 孔雀　鷹
七 鳥　兎
八 木菟　檜
九 鶯　鵜
一〇 鴉　鷲
一一 秋鶏　鵜
一二 鵜　鶏
一三 雀　鶺鴒
一四 鴫　四十雀
一五 掠鳥　百舌鳥
一六 鶫　啄木鳥
一七 鵜　舌鳥
一八 鴨　千鳥
一九 鴛鴦　都鳥
二〇 鷺　鷄
二一 雞　鳳
二二 鳥　哥鳥
二三 以上五十三種

◇精巧コロタイプ印刷◇四切判臺紙附◇各輯二十葉袋入◇

定價金參圓　送料壹拾貳錢　（內容見本進呈貳錢切手封入御申込乞）

發行所　合名會社　芸艸堂

東京市本鄉區湯島一
電話下谷三六〇〇番
振替東京四〇九〇番

京都市寺町二條南
電話上二〇九番
振替下阪二五八番

◇紫雲藝術叢書◇

金井紫雲著　鳥と藝術

四六判三二九頁　木版刷裝幀全一冊
口繪原色版・コロタイプ版二十九葉
定價金參圓　送料二十一錢

◇荒木十畝畫伯題簽
◇森　白甫畫伯
　竹原嘲風畫伯裝幀

本書には鳥類の中で藝術に深い交渉をもつもの五十三種を擇び鳥が藝術上から如何に眺められ、如何に味はれ如何に描かれてゐるかを說き、鳥に因む畫題を說き、典據を示し更に鳥を描いた古今の名作を擧げ、鳥と藝術のあらゆる文獻資料を蒐めしもの。題材の新奇、行文の暢達、口繪の鳥の名畫と善美を盡した裝幀と相俟ちての好著、敢へて世の美術家、歌人、俳人、一般趣味家に一讀を煩す所以である。

—目　次—

鶴　鷲　鸚　連雀　燕　瑠璃　鳩　尾長鳥　雉　叭々鳥　雀　鶫　鶇　長鳥

山鳥　杜鵑　翡翠　鸚鵡　佛法僧　野鵐　白鷺　伽藍鳥　孔雀　鷹　鷲

鳶　木菟　檜　鶯　鵜　鳶　秋鶏　鵜　鵜　鴉　兎　鳥　雞　鴫

雀　鶺鴒　鴫　四十雀　掠鳥　百舌鳥　鶫　啄木鳥　鵜　舌鳥

雁　鴨　鴛鴦　千鳥　都鳥　鷭　鵜　鷄　鳳　哥鳥　鳥　以上五十三種

◇既刊◇

花と藝術	樹木と藝術	草と藝術	動物と藝術	魚介と藝術	蔬果と藝術	虫と藝術
非水畫伯裝幀 口繪二十八葉 本文二六八頁	十畝畫伯題簽 筒畝畫伯裝幀 口繪二十七葉 本文二七八頁	觀彥畫伯題簽 岳陵畫伯裝幀 口繪二十七葉 本文二九九頁	青邨、南風、希望 畫伯題簽裝幀 口繪三十葉 本文三一二頁	青邨畫伯題簽 裝幀 口繪三十葉 本文三一二頁	百穗畫伯題簽 逢春畫伯裝幀 口繪三十葉 本文三二〇頁	哨哉州畫伯裝幀 口繪二十八葉 本文三〇五頁
東洋畫の特長とする花鳥その花木のうちで特に東洋畫と交渉の深い五十種を選び花木の美術及び文學との關係を詳述せる好著なり	樹木がいかに藝術の上に現れてゐるか繪畫にはいかに扱はれてゐるか植物學的の說明から語源、傳說、その描かれた名畫をあげて詳述せり	玉堂、清方、青邨畫伯裝幀 本文二十葉 たんぽぽ、すみれを始め八十五種の草についてを一々說明し、その草にあらはれた文字や繪を擧げ藝術家の好參考資料とせるもの	哺乳類約三十種に就てあらゆる古今の文獻を涉獵して、藝術との交涉を明かにし口繪の動物名畫と善美を盡した裝幀と相俟ちての好著なり	河海の魚類を初め甲殼類、貝類に至るまで苟も水產物にして藝術に交涉を有するものは悉く此を收めて餘瀝なく極めて詳說研究書なり	蔬菜果實救荒六十種の色彩形狀、その來歷名稱、傳說や故事、詩歌俳句、これを表現した名畫名作、苟も藝術に緣あるものはよくこれを收攬して剩さず	昆蟲類をはじめ、兩棲類、爬蟲類、腹足類等の中で普通に虫と呼ばれてゐるもの中から、藝術に緣のあるもの、約四十種を選み、あらゆる古今の文獻を涉獵す。

◇續刊◇天象と藝術・山水と藝術

◇四六判　各冊　定價金參圓　送料二十一錢◇

發行所　合名會社　芸艸堂

東京市本鄉區湯島一
電話下谷三六〇〇番
振替東京四〇九〇番

京都市寺町二條南
電話上二〇九番
振替下阪二五八番

◇恩賜京都博物館編纂◇

桃山時代障屏畫集

桃山時代藝術の貴重なる文献資料

解説一冊附

圖版　原色版一葉　玻璃版八十二葉
寸法　竪一尺四寸巾一尺
用紙　別漉鳥の子紙
裝幀　別染表紙葛布帙入
定價　金拾五圓
送料五十錢

桃山時代は我が國民的意氣の最も昂揚せる時代であるが、當代藝術また斯る時代的特色を明瞭に表示して著しく豪宕雄健なる樣式を生み出し、殊に當代繪畫を代表する障屏畫はその華麗雄大の趣致を以て我が美術史上特異の光彩を放つてゐる。

這般恩賜京都博物館主催の展觀は卽ち斯る桃山時代前後の障屏畫の中に於て名作と目されるもの約四十點を一堂に陳列し美術家研究家はその潑剌たる桃山時代藝術の氣分を滿喫せられし事と思ふ。なほこの展觀に於て特筆すべきは從來世間に廣く知られざる逸品が數多く列べられたことであつて殊に本法寺藏唐獅子圖屏風（狩野山樂在印）、市田彌三郎氏藏柳橋水車圖屏風（長谷川宗也在印）、飯田新七氏藏千鳥水車圖屏風（西本願寺舊藏）、聖護院藏傳元信筆花鳥圖屏風、等は資料的價値の重要さを以て研究家の注意を喚起せし事は充分である。今館の編纂により桃山時代藝術の貴重なる文献資料として精巧なる印刷に附し本書なる。希くは藝術家、愛好家諸彦の座右寶として研究に鑑賞に必ずや一本を備へられん事を。

京都市寺町二條南
電話上二九〇番
振替京阪二五八番

發行所　合名會社　芸艸堂

東京市本郷區湯島一
電話谷下三六〇〇番
振替東京四〇九〇〇番

今や世は「能趣味」時代!!謡曲、地拍子、囃子、仕舞の研究は隆昌を極める。そして次に來るべきものは？「能面」の研究こそ、その尖端を行くであらう。

こゝに平生舞臺に使用される能面五十種を選み、繪はがきに作り、「能面趣味」の普及をはかる、――能面の木版畫集はこれが最初の出版である。

單なる寫眞スケッチとは違ふのである。「面」の藝術的效果が、奏風畫伯の筆に摘出醇化され、木版の雅趣と合して成つた五十葉の作品である。

「能面趣味」の高き香氣を直接印象するこの畫集を、是非とも座右に供へられよ!!或は机邊に飾り、或は同好の友に贈られよ!!

客と語る應接室の「翁」の面は「所千代」までの和氣をたゝへ、ようし、獨り座す書齋の「童子」からは「自ら春の眺め」の東風を感じるであらう。

談の友を誘ふに「大べしみ」の一葉を贈つて「明日參會申すべし」としたなら、如何に先方の感情に樂しさを增すであらう。

また「過日は失禮」の意を「深井」の面に言はせて、「許し給へや人々よ」とあつたならばいかに寛容なさぞ微笑さゝるであらう。

洒落の風懷をさそ微笑させるであらう。

花に月に、寒に暑に、祝ひに祭りに、趣味を共にする人の生活は、この「能面はがき」にこそ色彩づけられて行かう。

松野奏風畫伯筆
木版彩色刷
能面繪はがき

第一輯　翁・三番叟・若女・獅子口
第二輯　小尉・姥・童子・般若
第三輯　中將・喝食・深井・大べしみ
第四輯　笑尉・平太・小面・小べしみ
第五輯　大飛出・十六・景清・橋姫
第六輯　邯鄲男・蟬丸・增・小飛出
第七輯　黒髭・弱法師・孫次郎・山姥
第八輯　鼻瘤惡尉・今若・十寸髪・猿飛出
第九輯　石王尉・三日月・生成・慈童
第十輯　天神・近江女・筋怪士・長靈べしみ
第十一輯　朝倉尉・疲男・曲見・しかみ
第十二輯　阿古父尉・泥眼・鷹狸々

各一輯五拾錢　送料四錢
特誂　不動・眞蛇
金三十錢送料二錢

狂言面繪はがき

第一輯　乙・福之神・賢德・登飛
第二輯　祖父・舌切姫・白藏主・武惡
第三輯　大黒・嘘吹・尼・猿

各一輯五拾錢　送料四錢

風流能短册

奏上（前）・奏上（後）・安達原・井筒・翁・大原御幸・賀茂・邯鄲・熊坂・石橋・隅田川・蟬丸（シテ）・蟬丸（ツレ）・高砂・竹生島・鵜飼・道成寺（前）・道成寺（後）・巴・鉢木・花筐・船辨慶前（後）・松風・望月・弱法師・橋辨慶・鵜飼・三番三（二種）・末廣がり・素袍落・計三十三種）

各一葉タト入
金參拾錢　送料六錢

能短册十二月

三番三・鶴龜・隅田川・道成寺・石橋・賀茂・松風・安達原・井筒・熊坂・花筐・鉢木

短册帖　金四圓
桐箱入　金參圓五拾錢
送料各三十三錢

能面短册
三十五種出來

能姿繪葉書

觀世左近先生舞影（原色版）
第一輯　高砂・箙・大原御幸
第二輯　道成寺（前後）・鉢木・女郎花・望月
第七輯　翁・花月・羽衣・熊野・隅田川・松風・葵上・猩々
第八輯　鶴龜・弱法師・草子洗・百萬・鞍馬天狗・俊寬・船辨慶・同後

松野奏風畫伯筆（木版刷）
第一輯　三番三・賀茂・松風
第二輯　大原御幸（二種）・道成寺鉢木・安達原
第三輯　道成寺集（十葉）
第四輯　鶴龜・巴・弱法師・井筒・花筐・隅田川・船辨慶・熊坂
第五輯　竹生島（二種）・蟬丸（二種）・邯鄲・葵上・望月・石橋
第六輯　翁・高砂・羽衣・安宅・船辨慶・三番三・末廣狩・素袍落
第九輯　鶴龜（鶴）・鶴龜（龜）・半部・雲雀山・橋辨慶・鵜飼・大黒風流
第十輯　金剛巖先生舞影
杜若・三井寺・清經・隅田川・山姥・野々宮・鐵輪・鞍馬天狗（原色版）

各輯金五拾錢　送料二錢

東京市本郷區湯島一
電話谷下三六〇〇番
振替東京四〇九〇〇番

發行所　合名會社　芸艸堂

京都市寺町二條南
電話上二九〇番
振替京阪二五八番

金井紫雲編

藝術資料

諸家推奨

編者の金井紫雲君は、美術操觚界の長老でその忙しい新聞事業に關係しながら、三十年來動植物の藝術的研究に沒頭し、既に十數卷の著書も公にしてゐる篤學家である。今回多年の宿望で、新開界を退き、此の『藝術資料』の編纂に精進することゝなつた。我等同君を知る一人として、その適くべき處を得たことの欣びに堪へない。

今度その第一册が上梓された植物篇の『櫻』である。四六倍判數十頁の小册子ながら、廿頁を費澤な口繪として、櫻に關する名作や寫眞を收め、本文は植物學上の櫻から、史實、名稱語譯、故事傳說、品種、詩歌、戯曲俗謠あらゆる方面から櫻に關するものを拔萃收錄してゐる。實際便利此上ない試みである。かうして植物篇、動物篇と冊數を重ねて行つたら宮に藝術家のよい參考となるばかりでなく、各學校の教材資料として も、或は圖畫教育の上に、手工手藝の參考に、國史や國語の研究上に、將たまた動植物に關する古人の思想や好尚を知る上に於ても、情操教育上多大の效果あるを確信するし、かうした方面のみでなく、單に唯、家庭に於ける趣味の涵養上から見ても絶好のものとして推薦する所以である。

和田英作

私は作品が出來て、これに畫題をつけやうとする時、いつも金井紫雲氏の著作を參考とする。氏の不斷の努力は、これまで澤山の花鳥に關する著書を公にして居られるが、今回の藝術資料も全く同氏の獨壇場とも いふべきもので、我々藝術にたづさはるものは、此の資料に依つて裨益する處必らずや少からぬことを信ずるものである。

川合玉堂

私は鳥や植物を見る爲め、よく山へ行くがその時必らず、參考書の三四種は携へて行く例だが、さうした參考書の中で、我々の氣持とぴつたり合ふのは金井紫雲君の著作が第一である。藝術に理解の少い人の植物書や動物の書物は、どうも感興が薄い、こんな意味でも金井君は貴重な存在である。藝術資料は同君にして初めて出來る仕事だと思ふ。

小杉放庵

『藝術資料』の第一册を手にして、流石に金井君の仕事だと敬服した。内容はいふまでもない、體裁も實に感じがよく、眺めてゐた丈けでも倦きが來ない。唯に美術界のみならず花に對する趣味勃興の際であるから必らずや大歡迎を受くるであらう。希くは口繪の如き、慾をいへば原色版の數を增し、紙質も一層吟味した特製本を作つてほしいと思つてゐる。

杉浦非水

芸艸堂刊行
合名會社

金井紫雲編 各大家推奨

藝術資料

第三册 燕子花 菖蒲 卯の花 要目

口繪

御物抱一筆 燕子花鷸圖
光琳筆 燕子花屏風
松平家光琳八橋屏風
酒井抱一筆 八つ橋屏風
尾形乾山筆 八つ橋横物
酒井抱一筆 燕子花屏風
傳宗達筆 燕子花屏風
狩野常信筆 燕子花鳩圖
道一筆 燕子花風呂先
無款菖蒲衣裳人圖
光琳作 燕子花硯筥
抱一筆 卯の花時鳥圖
文晁筆 卯の花時鳥圖
宗達筆 卯の花燕子花圖
燕子花 寫眞
菖蒲 寫眞
卯の花 寫眞
以上原色版玻璃版
網目版合計二十頁

本文

燕子花菖蒲圖入
（燕子花）
燕子花雜考
伊勢物語の八つ橋
謠曲「杜若」
杜若の文字
燕子花の名作
燕子花の名歌
燕子花の名句
（花菖蒲）
端午と菖蒲
藥草の菖蒲
あやめの髪
あやめの輿
あやめの湯
菖蒲の傳說と戯曲
菖蒲の前 時鳥殺し
菖蒲浴衣 紫のゆかり
菖蒲の歌
花菖蒲の品種
花菖蒲の名所
（卯の花）
卯の花概說
枕草子の卯の花
卯の花の繪
卯の花の歌
卯の花の名句
以上

第一期植物篇（太文字既刊）

第一册 櫻
第二册 牡丹、芍藥、藤
第三册 燕子花、花菖蒲、卯の花
第四册 柳、躑躅
第五册 竹
第六册 蓮、睡蓮
第七册 秋草
第八册 菊
第九册 紅葉
第十册 松
第十一册 梅
第十二册 春の花

第二期

鳥類編 十二册

第三期

哺乳類篇 十二册

第四期

蟲魚篇 十二册